

高校生の進路選択に関わる要因分析

鈴木 規夫*
 椎名 久美子**
 石塚 智一*
 柳井 晴夫**

要 約

日本においては、高校卒業時における進路選択は、人生における重要な意思決定の一つである。このことに関して、多くの研究で進路選択に関連した進路意識あるいは動機などの点について知見が示されている。本研究は、全国の14,318人の高校生を対象にした調査項目を利用して、これらの特性間の関係を調べることである。要約結果は以下の通りである。

高卒後高等教育機関に進学するか就職するかの進路選択は、次の2つの要因に主として影響を受ける。一つは学業成績や両親の期待などの個人的要因である。もう一つは、進学率や学科などの組織的要因である。これらの要因は、過去の研究結果と一致していた。

学業成績および両親の期待といった個人的要因は、学歴志向、学習努力、進路展望といった進路意識を形成する上で強い影響を与えるが、組織的要因はほとんど影響を与えていない。

因子分析により、学業志向動機およびモラトリアム動機の2つを見出した。これら2つの動機と進路意識との関係を調べた結果、学業志向動機と3つの進路意識の間には強い正の相関が見られた。さらに、分析の結果、男子に比べ女子の方が学業志向動機が強いことが分かった。一方、モラトリアム動機は学習努力および進路展望との間では負の関係が見られたが、学歴志向との間では正の関係が見られた。このことは、学歴志向の意識が強い生徒は、大学入学後生活をエンjoyしたい傾向にあることを意味している。

学部選択において、進路展望、理系学力、モラトリアム動機が強く影響を与えていることが分かった。

キーワード：進路選択, 進路意識, 学歴志向, 学習努力, 進路展望, 学業志向動機,
 モラトリアム動機

* 大学入試センター研究開発部 評価・追跡研究部門

** 大学入試センター研究開発部 進学適性研究部門

I. 問題の所在

1. 研究の目的と枠組み

進路指導が特に偏差値重視の進学指導と呼ばれるようになって久しい(仙崎・柳井, 1991)。大学への進学希望者が多数存在し、選抜のための方法が主として入学試験の成績や調査書など学力に関連した資料によって行われているかぎり、進学準備中心の教育を止めることはできない。そのような状況の中で、果たして生徒はみずから自己の生き方や将来への展望を考えながら進路を決定しているのであろうか。進路の選択にあたっては、学力向上はもちろんのこと、その目標に向かっての努力もなされているのであろうか。

文部省学校基本調査によると大学・短大への志願者数は1992年の121万人をピークに年々減少しているが、進学率からみるとなお上昇の一途を辿っており、高等教育の大衆化はますます進行する傾向にある。そのような高等教育の大衆化や少子化が進む中、生徒のものの考え方や価値観は変化し、また進路に対する考え方も変わろうとしている。例えば、従来の大学を中心とした進学から、時代に即応して実践的な職業教育や専門的な技術教育を行う専修学校をも視野に入れた進学へと幅広く進路を考える傾向は強くなってきており、また、大学への進学を目指す場合でもトップを目指す努力ではなく、一段上を目指した努力へと変貌しつつあるとの指摘もある(天野, 1986)。

この点に関して大学入試センター研究開発部では、大学の大衆化あるいは少子化の影響が進路の考え方や価値観に関していかなる変化をもたらしているかを調べるため、全国の中学3年生、高校1, 2, 3年生および社会人を対象にしてアンケート調査を実施した。その調査結果は研究報告書としてまとめたところである(大学入試センター, 1996)。報告書の記述は主に中学・高校・社会人の各世代間での生活、学習、進路、生き方などの進路全般に関わる考え方の差異を世代間で比較したものである。その結果から、以前に比べ興味・関心を重視した進路選択傾向や将来の職業を意識した資格取得志向が強くなっていることが分かった。

しかし、そこでは項目毎の単純集計を中心としたものであり、項目相互間の関連を視野に入れた分析は試みてはいなかった。そこで本稿では報告書の補完的な意味を込めて、特に進路と関わりの強い進路意識、進路動機、進路先などの関連分析を中心に分析を行うことにした。具体的には、「学歴志向」「学習努力」「進路展望」という3つの進路意識に関連する概念を構成し、それらが進学動機の形成上において、あるいは進路選択において、どのような影響を与えているかを分析しようとするものである。

この種の研究については枚挙にいとまがないほど多数あり、様々な側面から分析が行なわれている。例えば、「学歴志向」は、進路分化(進学か就職か)について教育社会学的な視点からの研究が多数見られる。進路分化に関わる規定要因として、学業成績の他、学校の階層構造、父親の出身階層や収入水準などの家族背景要因などを取り上げ、それらの関係から進路分化について説明を加えた研究(藤田, 1980, 山本, 1979, 吉本, 1984)や、進路指導を中心とした教師と生徒との関係あるいは生徒文化など教育組織内要因をとりあげながら進路分化について説明を試みた研究(天野・河上, 1983)などがある。また、「学習努力」あるいは「進路展望」に関連した研究としては、教育心理学的な視点から進学動機(湧上, 1984)や進路成熟や成績と進路分化の関連(下山, 1984)あるいは進路成熟と父母、友人、教師との関連(清水・他, 1988)や進学指導の改善を目指した研究(柳井・前川・豊田, 1991)などが上げられる。また、進路意識の構造的なアプローチとして「学力重視の進路展望」と「適性重視の進路展望」の2つの意識をそれぞれ因果モデルで表したものの(豊田・他, 1991)やそれらを統合して因果モデルで表したものの(鈴木・柳井, 1993)などがある。

本研究では、先行研究で得られた知見を確認しながら、3つの進路意識をキー概念として用い、それらと進学動機や進路選択の間の関係を、より総合的に考察することを目指している。分析の枠組みを示した概念図を図I.1に示す。この概念図にもとづいて、具体的には、次のような視点から分析を試みる。

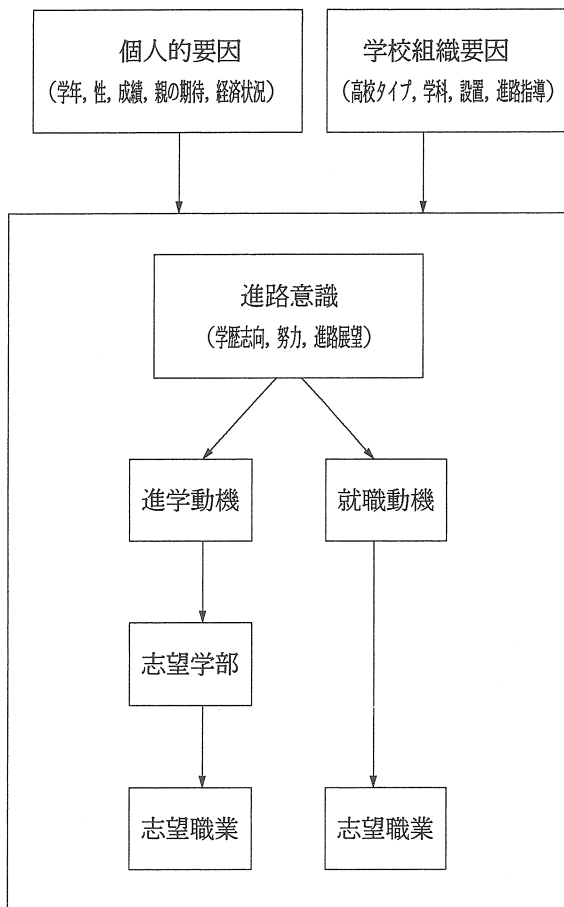


図 I.1 分析の枠組み

(1)進路意識を「学歴志向」「学習努力」「進路展望」の3つの要素でとらえる。そして、それぞれの要素が個人的要因（学年、性、成績、家庭背景（親の期待、経済状況））および組織的要因（高校タイプ、学科、設置、進路指導）によってどのような影響を受けるかを再確認する。既存の研究では、進路分化の結果（大学進学か就職か）に関連する要因の強さについて分析を試みていることが多いが、本研究ではむしろ進路分化に影響を与える進路意識の持ち方の方に重点を置いた。それは、進路の決定という場面では、個々の生徒はそれぞれが様々な考え方にもとづいて進路選択を行っており、そのような考え方の一側面として進路意識は重要な意味をもっており、その進路意識の違いは、進路選択の内面的な様相を把握する上で有用であると考えたからである。

また、本研究では影響要因を多数取り込んで

いる。既存の研究では、一部の要因だけを取り上げ、その効果について論ずる場合が多いが、ここでは個人的な要因および組織的要因の両者を取り上げることにより、総合的に各要因の効果を比較検討することを試みる。それは、ここで扱う標本数が多量であるため、要因数を増やしたとしても、カテゴリ×要因のクロス表の各セルに含まれる標本数を十分に確保できるため、分析が可能であるためである。

(2)次に、大学等へ進学する者に対して、進路意識が進学動機の形成においてどのような形で関わっているかを分析する。

(3)さらに、希望進路に対して、進路意識や成績あるいは進学動機がどのような形で影響を与えているかを分析する。下山（1984）は、進路決定過程において成績要因が重要な意味をもっており、進路結果や卒業後の自己の進路についての考え方は、成績要因によって左右されると指摘している。もちろん成績要因は重要な要因の一つであると考えられるが、進路意識の持ち方は、進学動機や実際の進路先にも強い影響を与えると考えられる。そこで、本研究では成績以外の要因をも取り込んだ形で効果を調べてみる。

(4)進路意識未成熟者の分析：特に進路意識の低い生徒の特徴は、進路指導の実施をより効果的に実践していく上で、多くの有用な情報を提供してくれるものと思われる。そこで、改めて進路意識未成熟者を対象にして分析を試みる。

2. 分析の方法

2.1 データ

大学入試センター研究開発部では進路の考え方や価値観に関連した調査を中学生・高校生および社会人を対象にして実施した。分析対象としたデータは、平成7年7月に実施した、「中学生・高校生の進路意識に関するアンケート調査」（調査Ⅰ）のデータの一部である。この調査は、全国の中学生および高校1、2、3年生を対象に、ランダムサンプリングによって行われたものであり、各学校約35人（1学級分）程度を目安にアンケートを発送・依頼し、計21,729人の回答を得た（回

収率82%)。この調査に関する結果の概要は研究報告書(大学入試センター, 1996)としてまとめられているので参照されたい。さらに、中高生に用いた項目の約半数の項目を共通にした調査を18歳～50歳代の1,832名に実施している。これらの詳細についても同一の研究報告書を参照されたい。本研究の分析ではこのうち、高校生の回答したデータ14,318人を対象にした。内訳は、男7,604人、女7,195人、高校1年4,823人、2年4,717人、3年4,778人である。また、学校数は計381校で、学科別にみると普通科が332校、職業科が49校、設置別では公立校が274校、私立校が107校である。学校の所在地は全都道府県にまたがっている。

なお、場合によっては分析結果の表や図に示す人数において欠測値により多少の誤差が生じていることを付記しておく。

2.2 進路意識の構造

生活、学習、進路、生き方について調査を実施したが、本研究では、進路意識に関連する項目として表I.1に示すような11項目を用いた。これらの項目(4段階評定)を要約するため、因子分析(バリマックス回転)を行った。因子数は解釈が妥当と思われる3因子解を採用した。表I.2はバリマックス回転後の因子パターンを示している。

因子1は、「社会に認められるために高学歴を得たい」あるいは「安定した職業につくために高学歴を得たい」などの項目で負荷が高く、学歴の効用に関する意識と考えられるので「学歴志向」の因子と解釈した。この因子には「入試は一生を左右する」「高い偏差値をもつ大学は良い大学である」という項目が中程度の負荷量をもつことは興味深い。

因子2は、勉強、努力に関連した項目で負荷が高く、「学習努力」の因子と解釈する。また、因子3は、将来の進路に関する意識項目で高い負荷を示し、また因子2についても、「希望職業の有無」という項目も中程度の負荷を示していることから、「進路展望」に関する因子と解釈した。

表 I.1 進路意識に関連する項目

Q1-8	友達と将来について本気で話し合うことが多い
Q1-14	上級の学校に進むために勉強している
Q1-16	自分をみがくために勉強している
Q1-27	偏差値の高い大学はよい大学だと思う
Q1-29	社会に認められるため高い学歴を得たい
Q1-30	安定した職業につくため高い学歴を得たい
Q1-31	入学試験は一生を左右する重大事だと思う
Q1-33	学校を卒業してから将来つきたいと考えている職業がある
Q1-37	卒業後のことをしばしば真剣に考える
Q2-1	家や図書館での一日の勉強時間
Q3-2	学業成績をあげるための努力

表 I.2 バリマックス回転後の因子パターン (進路意識)

進路意識項目	因子1	因子2	因子3
Q1-29 高学歴-社会に認められる	0.867	0.141	-0.001
Q1-30 高学歴-安定した職業	0.816	0.142	-0.015
Q1-27 高い偏差値=よい大学	0.483	0.067	-0.081
Q1-31 入試は一生を左右	0.430	0.121	0.107
Q2-1 家・図書館での勉強時間	0.083	0.758	0.071
Q3-2 学業成績向上の努力	0.096	0.616	0.184
Q1-14 勉強の目的-上級学校	0.297	0.601	0.108
Q1-16 勉強の目的-自分をみがく	0.118	0.429	0.278
Q1-37 卒業後のことを真剣に考える	0.069	0.109	0.753
Q1-8 友達と将来を語る	-0.001	0.128	0.490
Q1-33 希望職業の有無	-0.058	0.104	0.430
分散の2乗和	1.962	1.590	1.137

2.3 個人的要因と組織的要因

進路意識に与える要因として、多くの研究で用いられている要因を取り上げる。ここでは、それらの要因を個人的なもの(個人的要因)と所属している学校組織によるもの(組織的要因)に分類して考える。

(1) 個人的要因

学年：高校1年／2年／3年

性：男／女

成績：所属する学校における主要5教科の自己評価結果の合計点を用いた。そして、合計点

(1～20点)によって3群〔低(1～8点)／中(9～13点)／高(14～20点)〕に分類した。次に、高校によって合計点に偏りがなかったかを確認するため、高校毎に合計点の平均値を算出し、平均値の分布を調べてみた(図I.2)。分布の平均は11.4、標準偏差は0.96であった。また、高校タイプによって差異がないか調べたが全体の分布とほぼ同じ結果を得た。この結果から、標準偏差は小さく平均値は集中しており、学校により合計点の偏りは非常に小さいことを確認することができた。

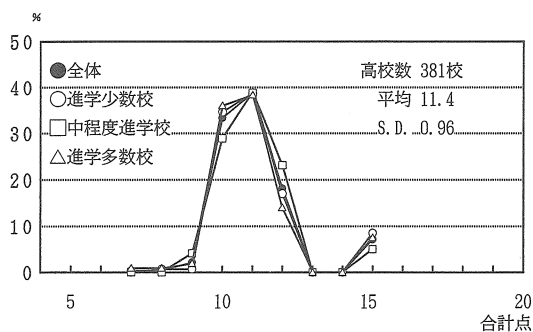


図 I.2 高校毎にみた5教科自己評価の合計点の平均値の分布

親の期待：「進路に対する親の期待を強く感じる(4段階評定)」という項目を利用し、2群〔期待小(1または2)／期待大(3または4)〕に分類した。

経済状況：「進みたい進路に対して経済的な不安がある(4段階評定)」により、2群〔不安無(1または2)／不安有(3または4)〕に分類した。

(2) 組織的要因

高校タイプ：平成8年度のセンター試験志願者数の多少によって進学校かどうかを判定することにした。具体的には、志願者数が0～10人の場合を「進学少数校」(28.0%)、11～100人の場合を「中程度進学校」(31.8%)、101人以上の場合を「進学多数校」(40.2%)と名付けることにした。

学科：普通科／職業科

設置：公立／私立

進路指導：生徒の進路選択に際し、学校での進路指導は重要な役割を担っている。しかし、その進路指導の実践は学校によって大きな違い

が見られ(仙崎・柳井,1991)、その違いは生徒の進路意識の形成にも大きな影響を与えていると考えられる。そこで本研究でも、進路指導体制に関する要因も取り込んで分析することにした。

しかし、本研究で対象とした381校の具体的な進路指導体制に関わる情報(進路指導室の有無、研修、進路情報、進路指導の計画など)は手元になく用いることができないので、生徒が受けた進路指導の評価結果を代用することとした。具体的には、進路指導に関連する項目「将来の進路のことについてよく指導や相談をしてくれる」および「学校には進みたい進路についての情報が十分ある」の2項目(4段階評定)の評価結果(合計点)を用いて、各学校毎に平均値を算出し、その平均値にもとづいて学校を2群〔消極的指導(5.5点以下)／積極的指導(5.5点以上)〕に分類した。進路指導体制に関する間接的な評価ではあるが、生徒の意識を反映した結果であるので、むしろ進路指導の実態に見合った情報であると思われる。

以上の分類による学校の構成状況を表I.3に示す。

表 I.3 組織的要因からみた学校数

(学科×高校タイプ)		学校数(%)		
学 科		進学少数校	中程度進学校	進学多数校
普通科		63 (19.0)	116 (34.9)	153 (46.1)
職業科		44 (89.8)	5 (10.2)	0 (0.0)
		計		
		332 (87.1)		

$$\chi^2 = 107.1 (p < 0.001)$$

(設置×高校タイプ)

設 置	進学少数校	中程度進学校	進学多数校	計
公 立	92 (33.6)	75 (27.4)	107 (39.1)	274 (71.9)
私 立	15 (14.0)	46 (43.0)	46 (43.0)	107 (28.1)

$$\chi^2 = 18.7 (p < 0.001)$$

(進路指導×高校タイプ)

進路指導	進学少数校	中程度進学校	進学多数校	計
消極的	65 (33.3)	69 (35.4)	61 (31.3)	195 (51.2)
積極的	42 (22.6)	52 (28.0)	92 (49.5)	186 (48.8)

$$\chi^2 = 13.4 (p < 0.001)$$

以下では、このように定義した各要因カテゴリにもとづいて分析を進める。

II. 結果と考察

1. 希望進路

まず始めにこの調査の回答結果を利用して、希望進路について影響する要因に関する知見を確認しておく。ここでは希望進路として、大学・短大等進学、専修学校進学、高卒後就職、進路未定の4カテゴリを設定した。そしてこれらのカテゴリと個人的要因および組織的要因との間でクロス表

を作成した。表II.1aおよび表II.1bはその結果を表したものである。

標本数が多量だということもあり、全ての要因で有意となっているが、特に高度に有意となっている要因は、高校タイプ、学科、親の期待であった。この結果は、既に得られた知見と一致するものである。つまり、高等教育機関へ進学するか否かは高校タイプおよび学科の違いによる影響が最も強く、次いで個人的要因である親の影響や成績の影響も強く働いていることを、改めて確認することができた（例えば藤田，1980）。

表II.1a 希望進路（個人的要因）

		（学年）				人（％）
学 年	大学短大進学	専修学校進学	高卒後就職	進路未定	計	
1 年	2456 (51.0)	1333 (27.7)	610 (12.7)	415 (8.6)	4814 (33.7)	
2 年	2896 (61.6)	1117 (23.8)	465 (9.9)	220 (4.7)	4698 (32.9)	
3 年	2577 (54.1)	1257 (26.4)	805 (16.9)	126 (2.6)	4765 (33.4)	

$$\chi^2 = 320.8 \text{ (} p < 0.001 \text{)}$$

（性別）

性	大学短大進学	専修学校進学	高卒後就職	進路未定	計
男	4266 (58.2)	1494 (20.4)	1060 (14.5)	514 (7.0)	7334 (51.4)
女	3663 (52.8)	2213 (31.9)	820 (11.8)	247 (3.6)	6943 (48.6)

$$\chi^2 = 299.1 \text{ (} p < 0.001 \text{)}$$

（学業成績）

成 績	大学短大進学	専修学校進学	高卒後就職	進路未定	計
低	1009 (43.6)	642 (27.8)	438 (18.9)	224 (9.7)	2313 (16.2)
中	4548 (54.6)	2300 (27.6)	1063 (12.8)	420 (5.0)	8331 (58.4)
高	2372 (65.3)	765 (21.1)	379 (10.4)	117 (3.2)	3633 (25.5)

$$\chi^2 = 362.0 \text{ (} p < 0.001 \text{)}$$

（親の期待）

影響	大学短大進学	専修学校進学	高卒後就職	進路未定	計
低	3128 (46.2)	1942 (28.7)	1213 (17.9)	492 (7.3)	6775 (47.5)
高	4801 (64.0)	1765 (23.5)	667 (8.9)	269 (3.6)	7502 (52.6)

$$\chi^2 = 549.8 \text{ (} p < 0.001 \text{)}$$

（経済状況）

経済状況	大学短大進学	専修学校進学	高卒後就職	進路未定	計
不安無	4759 (57.4)	1819 (21.9)	1235 (14.9)	485 (5.8)	8298 (58.2)
不安有	3160 (53.0)	1884 (31.6)	642 (10.8)	275 (4.6)	5961 (41.8)

$$\chi^2 = 191.5 \text{ (} p < 0.001 \text{)}$$

表II.1b 希望進路（組織的要因）

		（高校タイプ）				人（％）
高校タイプ	大学短大進学	専修学校進学	高卒後就職	進路未定	計	
普通科	926 (24.4)	1169 (30.9)	1379 (36.4)	315 (8.3)	3789 (26.5)	
職業科	2518 (55.4)	1384 (30.5)	384 (8.5)	257 (5.7)	4543 (31.8)	
専門科	4485 (75.4)	1154 (19.4)	117 (2.0)	189 (3.2)	5945 (41.6)	

$$\chi^2 = 3563.7 \text{ (} p < 0.001 \text{)}$$

（学科）

学 科	大学短大進学	専修学校進学	高卒後就職	進路未定	計
普通科	7513 (60.0)	3274 (26.1)	1139 (9.1)	599 (4.8)	12525 (87.7)
職業科	416 (23.7)	433 (24.7)	741 (42.3)	162 (9.3)	1752 (12.3)

$$\chi^2 = 1708.7 \text{ (} p < 0.001 \text{)}$$

（設置）

設 置	大学短大進学	専修学校進学	高卒後就職	進路未定	計
公 立	5100 (50.1)	2802 (27.5)	1674 (16.5)	602 (5.9)	10178 (71.3)
私 立	2829 (69.0)	905 (22.1)	206 (5.0)	159 (3.9)	4099 (28.7)

$$\chi^2 = 533.8 \text{ (} p < 0.001 \text{)}$$

（進路指導）

指導	大学短大進学	専修学校進学	高卒後就職	進路未定	計
消極的	3662 (50.4)	2104 (29.0)	1031 (14.2)	465 (6.4)	7262 (50.9)
積極的	4267 (60.8)	1603 (22.9)	849 (12.1)	296 (4.2)	7015 (49.1)

$$\chi^2 = 260.1 \text{ (} p < 0.001 \text{)}$$

2. 進路意識の形成に及ぼす要因

さて、本研究の分析の枠組みに沿って、始めに進路意識の形成にあたってどのような要因が影響を与えているかを調べるため、因子分析で抽出した3因子の因子得点について、個人的要因および組織的要因による分散分析を行う。

個人的要因としては学年、性、成績、親の期待、経済状況の5要因を設定し、5要因による分散分析を行う。ここでは主効果のみをとりあげ、交互作用は考慮しなかった。一般にはこのように多数の要因を取り込んだ分散分析が行なわれることは少ない。本研究では標本数が約15,000と多数あり、また、多重クロスによって分割した場合でも最小セルで54ケースのデータを含んでおり、データを含まないセルがないことを確認できたので、できるだけ多くの要因を同時に評価することを目指すため、このまま5要因による分散分析を実施することにした。

組織的要因については、職業科で進学多数校の学校が存在しなかったこともあり、学科を外した高校タイプ、設置、進路指導の3要因による分散分析を行うことにした。

表II.2 分散分析におけるF値（進路意識）

（個人的要因）			
要因	F1学歴志向	F2学習努力	F3進路展望
学年	24.7*	20.0*	286.1*
性	34.9*	155.2*	916.3*
成績	76.2*	473.7*	63.7*
親の期待	604.7*	500.2*	277.7*
経済状況	15.6*	0.2	225.4*

* $p < 0.0001$

（組織的要因）			
要因	F1学歴志向	F2学習努力	F3進路展望
高校タイプ	68.8*	1042.8*	30.2*
設置	27.4*	79.8*	13.2
進路指導	1.2	183.0*	12.5

* $p < 0.0001$

各因子に関する分散分析の結果のうちF値をまとめて表II.2に示す。なお、研究に用いた標本数が多数ということもあり、多くの要因で有意となることが予想されていたので、解釈の際には高度に有意となった要因を中心に行うことにした。

2.1 学歴志向

個人的要因では、特に「親の期待」が高度に有意となった（表II.2）。各要因カテゴリの平均値を図II.1aに示す。図からも分かるように、親の期待に関しても「期待小」の群と「期待大」の群で差異が大きい。また、「成績」に関しても低成績群と高成績群とでは大きな差異が見られる。このことから、「学歴志向」を規定する要因として「親の期待」が最も強い影響を与えていることが分かる。一方、組織的要因では「高校タイプ」が高度に有意となった。なお、学歴志向と「進路指導」との間では殆ど関連がなかったことは留意しておく必要がある。

この結果は、希望進路に関するクロス表の結果とほぼ対応しており、「学歴志向」と「希望進路」は同一の要因が関係していることが分かる。

2.2 学習努力

学習努力に関する分散分析の結果をみると、個人的要因は「成績」「性」「親の期待」の3要因で高度に有意となった（表II.2）。特に「成績」「親の期待」でカテゴリ間に差異が顕著である（図II.1b）。一方、組織的要因としては全ての要因が高度に有意となったが、特に「高校タイプ」で差異が顕著である。

「努力」についてはここで取り上げたすべての要因で正の方向に働いており、その中で個人的には「成績」「親の期待」が、学校組織からみると「高校タイプ」の違いが「努力」の仕方に強く影響を与えていることを確認することができる。

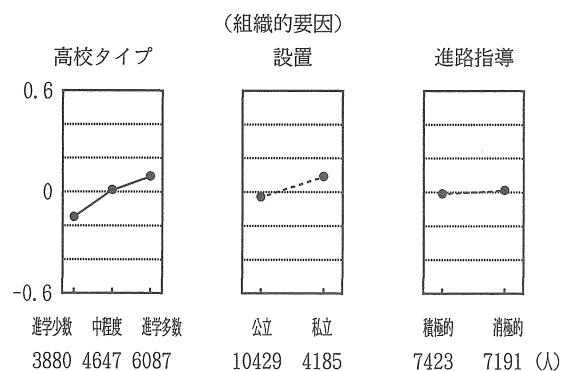
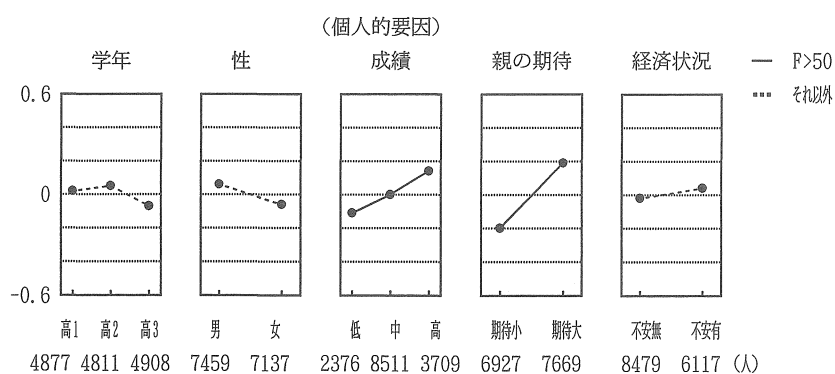


図 II.1a F 1「学歴志向」因子得点の平均値

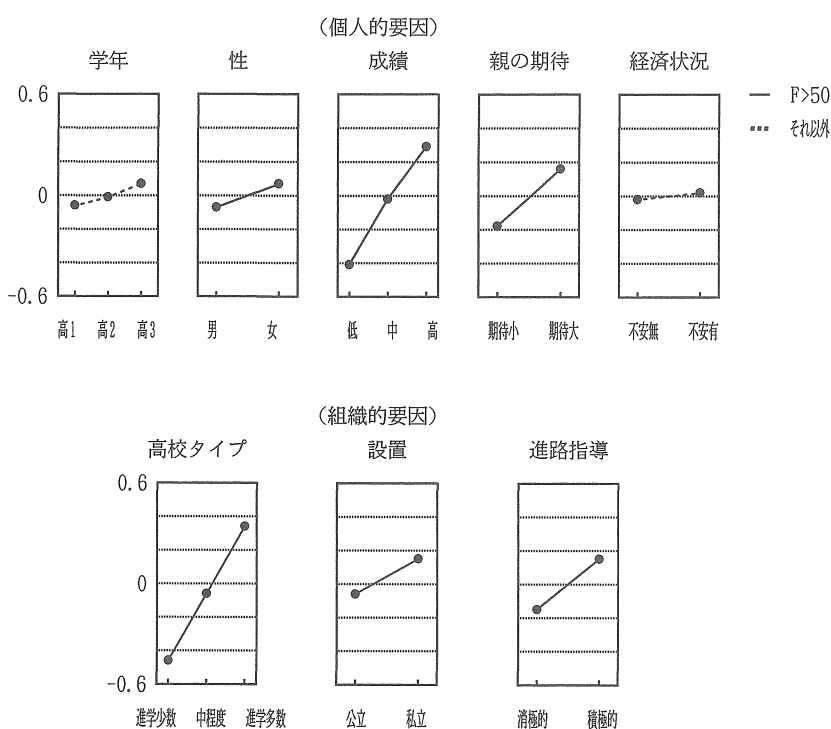
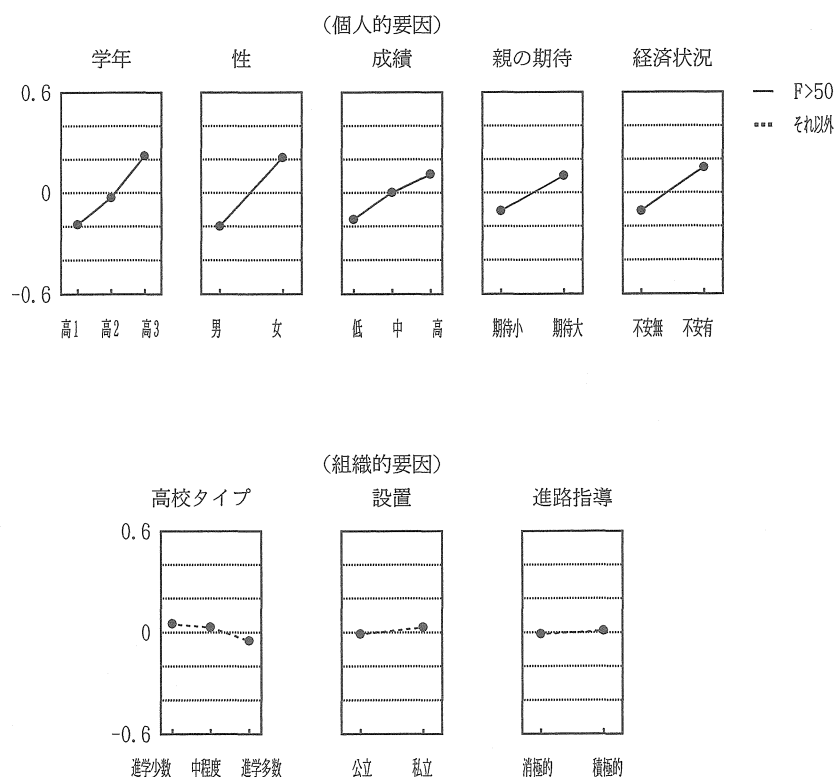


図 II.1b F 2「学習努力」因子得点の平均値



図II.1c F 3「進路展望」因子得点の平均値

2.3 進路展望

個人的要因については、全ての要因が高度に有意であった（表II.2）。いずれの要因も図II.1cに見られるようにカテゴリ間で差異が顕著に表れている。具体的には、学年の上昇につれ進路意識が強まること、また男子に比べ女子の方が進路意識が強いなどの特徴が見い出せる。この特徴は鈴木・柳井（1993）においても触れている。

進路を考えるにあたり、「自分はどのような職業につきたいのか（希望職業）」「自分は何が向いているのか（興味・関心・適性）」など将来の自分の生き方を考えることは、青年期を迎えた若者にとって避けては通れない道である。その意味で「進路展望」因子には、様々な要因が混在していることが考えられ、ここで得られた結果はむしろ当然のことと再確認されるものであった。一方、学校組織要因としてとりあげた高校タイプ、設置、進路指導の3つの要因は、いずれも高度に有意とはならなかった。

「進路展望」は本来生徒自身の問題ではあるが、進路指導を通して様々な援助がなされ、進路意識の形成において重要な役割を果たすべきである。しかし、分析結果は、「生徒自身が学校で進路相談や進路情報などの学校組織による援助をたとえ積極的に受けていると感じても、このことが生徒全体の水準において自己の「進路展望」を高めることには必ずしもつながっていない」ということを示している。

進路指導体制の充実が叫ばれて久しいが、それは目前の進学あるいは就職といった問題が中心であり、将来の人生設計の面までの援助が十分になされていないことが推測される。進路指導の定義によれば「進路指導は、生徒一人一人が、自分の将来の生き方への関心を深め、自分の能力・適性等の発見と開発に努め、進路の世界への知見を広めかつ深め、やがて自分の将来の展望をもち、…」（宮内、1994）と示されているが、進路指導を受ける生徒側の意識としては、この定義にもとづく援助がなされているとは思っていないという結果を示している。

3. 進路意識と進学動機の関係

涸上（1984）は、大学へ進学するか否かの段階における進学動機について、大学に関する本来的機能、家族への配慮に関する機能、モラトリアム機能、大学の副次的機能、大学の経済価値機能の5つの因子を取り上げた。

本研究では、それらの因子のうち大学に関する本来的機能に関する項目（「専門的な知識や技術を得るために進学したい」「幅広い教養を身につけるために進学したい」「資格をとるために進学したい」の3項目）および無目的意識としてのモラトリアム機能に関する項目（「とりあえずやりたいことがないので、進学したい」の1項目）をとりあげることにした。涸上の定義した動機の一部しか取り上げなかった理由は、例えば、家族への配慮に関する機能は本研究の個人的要因である親の期待と、また大学の経済価値機能は学歴志向と関連したものであり、進学に対する直接的な動機としては捉えていないためである。

分析の目的は、上で述べた進学志望動機が、個人に関わるいくつかの要因によってどのような影響を受けるかについて調べることである。ここでは、進路意識としての「学歴志向」「学習努力」「進路展望」に加え「性」に関する4要因を取り上げた。性については、特に女性は進路展望が高いことが前節で示されており、進学動機の上でも大きな影響を与えるであろうと考えたからである。

分析に先立ち、進学動機項目について因子分析（バリマックス回転）を行い、大学に関する本来的機能およびモラトリアム機能の2因子を抽出した（表II.3）。ここでは、分かりやすく、因子1は「学業志向動機」、因子2は「モラトリアム動機」と命名することにした。

表II.3 バリマックス回転後の因子パターン（進学動機）

進学動機	因子1	因子2
Q6-22 幅広い教養を身につける	0.850	0.151
Q6-23 資格取得	0.600	-0.404
Q6-21 専門的な知識・技術の取得	0.595	-0.547
Q6-24 とりあえず進学	0.021	0.890
分散の2乗和	1.431	1.278

また、進路意識に関する「学歴志向」「学習努力」「進路展望」は、因子得点が0点以上を「高群」、0点以下を「低群」と2群に分類してカテゴリカルデータとして用いることにした。

以上の前準備をして、4要因（進路意識3因子、性）による分散分析を行った。その結果を図II.2に示す。

(1)学業志向動機

学業志向動機については、全ての要因で高度に有意となった。学歴志向が高いほど、学習努力をしているほど、また進路展望が高いほどこの動機は高くなる。また男より女の方が高い。このように、進路意識全般および性が一様に影響を与えている因子である。

(2)モラトリアム動機

モラトリアム動機については「学歴志向」「進路展望」「性」の3要因で高度に有意となった。特に進路展望の高低による差異は大きい。なお、進路展望はモラトリアム動機とは負の関係にあったが、学歴志向はモラトリアムと正の関連をもった。つまり、モラトリアム意識の強い人ほど学歴志向が強い傾向にある。

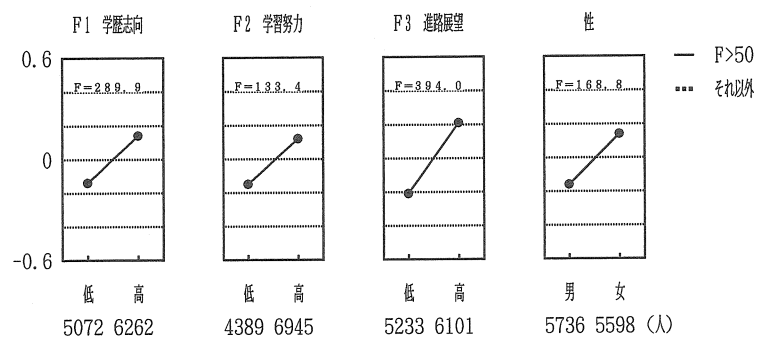
「学業志向動機」「モラトリアム動機」は、「進路展望」がいずれも強い影響を与えている。つまり「進路展望」は進学への動機付けのキーポイントと考えられる。

4. 「努力」の考え方

天野（1986）が示した努力観について考えてみよう。天野は著書の中で「…、入試制度があり、どの学校に入れるかが将来のキャリアと深いかわりを持っている以上、努力せざるをえない。しかし、その努力はトップをめざす努力であるよりも、少し手をのばせば届きそうな一段上をめざす努力であり、ひとに抜きん出るための努力であるよりも、ひとに遅れをとるまいとする防衛的な努力である。…」と述べている。

今日の生徒の進路に対する「努力」の考え方について適切に表現をしていると思うが、ここに改めて多量のデータによって、この「努力観」について検討してみようと思う。

F D 1 「学業志向動機」因子得点の平均値



F D 2 「モラトリアム動機」因子得点の平均値

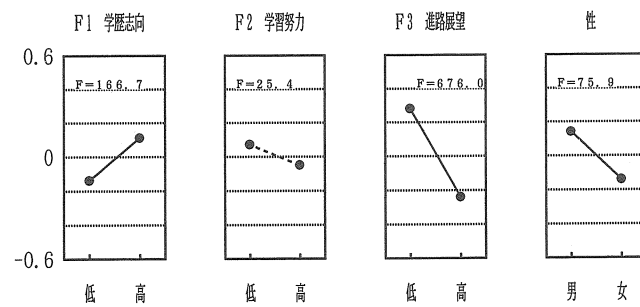
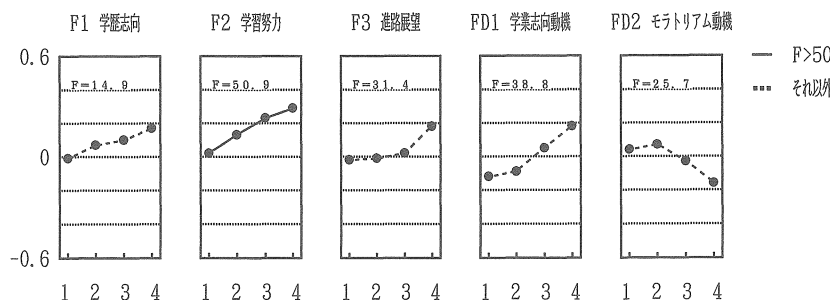


図 II.2 進学動機

A : 志望校の受験に失敗したばあい、ランクの低い学校に進学するよりも、浪人しても自分の第一希望を実現させたい



B : 苦勞してむづかしい大学へ進学するよりも、ほどほどのところに入って青春をエンジョイしたい

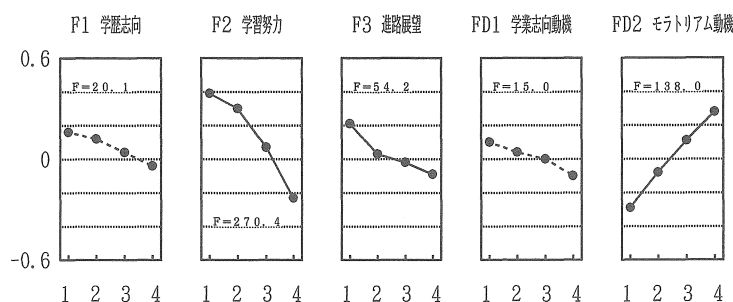


図 II.3 「努力」の考え方の項目の平均値

分析では、努力と関連の深い「A：志望校に失敗したばあい、ランクの低い学校に進学するよりも、浪人しても自分の第一希望を実現させたい」、「B：苦勞してむづかしい大学へ進学するよりも、ほどほどのところに入って青春をエンジョイしたい」の2項目を取り上げた。両者の間には-0.254と負の相関があり、関連はやや弱い互いに相反する意識を表している。

「A：第一志望を実現させたい」の回答結果を見ると、「あてはまる」と回答した生徒は全体の18%であった(表II.4)。「ややあてはまる」を加えても43%である。また、「B：青春エンジョイ」は全体の16%、「ややあてはまる」を加えると48%であった。一方、天野(1986)が行った調査の同様な内容に関して、「めざす学校に不合格だっ

たら、浪人して受け直すつもり」で53%、「学生生活を楽しみたいから」が52%であった。いずれも、ほぼ同じ結果である。この結果は、「何がなんでも第一志望に合格するまでがんばる」といった初志貫徹型の努力集団は全体の半数にも満たず、「第一志望にこだわらず、大学生活をエンジョイしたい」と考える、いわば「努力」に対してさめた意識あるいは「努力」を合理的に考える集団が過半数を越える状況にあることを示している。進学適齢層の減少や進学率の高まりと共に、この傾向はさらに一層強まることが予想される。

次に、このような努力観がどのような要因に影響を受けているかを調べてみた。ここでは進路意識および進学志望動機を取り上げ、一元配置の分散分析を行った(図II.3)。

この結果をみると、志望通り初志貫徹のための努力をするか否かは、日頃の学習努力のあり方が強く影響していることが分かる。日頃の学習努力に欠けている生徒ほど、ほどほどの大学へ入学し、青春をエンジョイしようとする意識が強く、逆に日頃から学習努力をしている生徒ほど志望校に対する目標が明確である。

表 II.4 「第一志望」と「青春エンジョイ」のクロス表

A	B : 苦勞してむづかしい大学へ進学するよりも、ほどほどのところに入って青春をエンジョイしたい				
	1 あてはまらない	2 あまりあてはまらない	3 ややあてはまる	4 あてはまる	計
1	513 (20.6)	487 (19.6)	725 (29.1)	766 (30.7)	2491 (22.0)
2	371 (9.4)	1354 (34.2)	1660 (41.9)	572 (14.5)	3957 (35.0)
3	449 (15.8)	1187 (41.8)	951 (33.5)	252 (8.9)	2839 (25.1)
4	853 (42.2)	602 (29.8)	342 (16.9)	224 (11.1)	2021 (17.9)
計	2186 (19.3)	3630 (32.1)	3678 (32.5)	1814 (16.0)	11308 (100.)

$$\chi^2 = 1717.8 \quad (p < 0.0001)$$

5. 高等教育機関進学希望者の進路の選択

5.1 進路先

前節までに、進路意識の形成や進学動機を持ち方について、様々な要因が影響していることを確認できたが、本節では具体的な進路先との関係から、進路意識の形成や進学動機の影響の強さについて検討してみる。進路先は、進路決定プロセスにおける具体的な意志決定結果と考えることができる。そこで、意志決定結果としての進路先が、どのような要因に影響を受けているかを調べるのが本節での目的である。

まず始めに高等教育機関に進学を希望している者について、具体的にどのような進路を希望しているか、その進路先について確認しておこう。ここでは、志望学部×志望職業のクロス表を用いて数量化Ⅲ類を行い学部と職業の関係を見ることにする（図Ⅱ.4）。

I 軸は、左端に医歯薬系および医療が付置し、それ以外の学部や職種が右側に付置している。そ

の付置状況から、医療関係を目指すかそれ以外かを示す軸と考えられる。またⅡ軸の上方は女性が多く芸術系と芸術が付置しているが、下方は男性が多く理工系や技術技能が付置することから芸術的・科学的を分ける軸と考えることができよう。

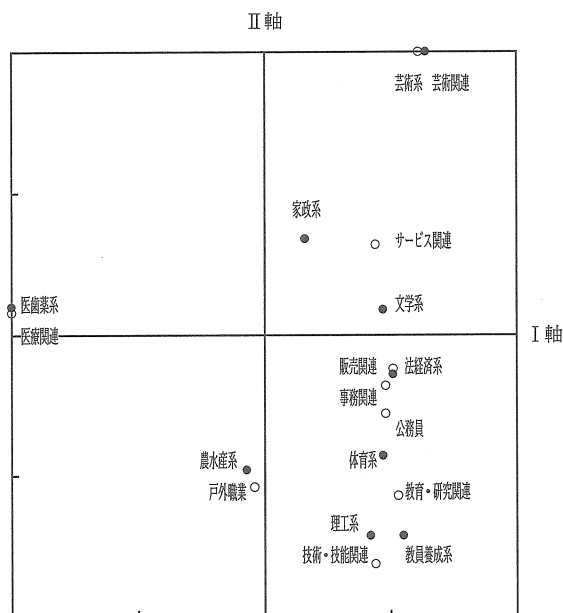
学部と職業の関連をみると、法経済系、文学系、体育系は複数の職種との関連をもっているが、家政系を除く他の学部は特定の職種と関連をもつ傾向にあることが分かる。家政系は、他の学部や職種との関連が薄く、特定の職種との結びつきが弱い。

具体的には、教員養成系は教育研究、理工系は技術技能、医歯薬系は医療、農水産系は戸外、芸術系は芸術、と特定の職種と強く結びついているが、法経済系は事務、販売や公務員、文学系はサービスや事務、体育系は公務員や教育研究などと関連している。

5.2 志望学部の選択に関わる要因

本節では、志望学部の選択に際しどのような要因が関わっているか、進路意識、進学動機および教科科目の成績から調べてみる。

教科科目の成績については、主要5教科の教科成績の自己評価結果にもとづき、因子分析（バリマックス回転）によりいわゆる文系および理系の2因子を抽出した（表Ⅱ.5）。自己評価結果ではあるが、きれいに文系および理系の教科に因子構



図Ⅱ.4 志望学部と志望職業との関連（数量化Ⅲ類）

表Ⅱ.5 バリマックス回転後の因子パターン（学業成績）

教科	因子1	因子2
国語	0.850	0.053
社会	0.757	0.230
英語	0.645	0.274
数学	0.085	0.910
理科	0.351	0.773
分散の2乗和	1.841	1.557

表 II.6a 志望学部からみた各因子得点の平均値 (全体)

志望学部	人数	学歴志向	学習努力	進路展望	文系学力	理系学力	学業志向動機	モラトリアム動機
法経済系	1373	0.31 (0.88)	0.29 (0.77)	-0.11 (0.78)	0.30 (1.02)	-0.03 (0.99)	-0.08 (1.11)	0.33 (1.06)
文学系	1912	0.10 (0.85)	0.27 (0.76)	0.07 (0.77)	0.43 (0.91)	-0.42 (0.90)	-0.03 (0.98)	0.26 (0.97)
教員養成系	1061	0.00 (0.85)	0.28 (0.73)	0.23 (0.72)	0.12 (0.96)	-0.04 (0.94)	0.24 (0.90)	-0.21 (0.80)
理工系	2201	0.21 (0.89)	0.18 (0.81)	-0.19 (0.81)	-0.27 (0.97)	0.58 (0.99)	-0.04 (1.02)	0.03 (1.00)
農水産系	279	-0.05 (0.94)	0.36 (0.74)	0.10 (0.75)	0.06 (1.02)	0.28 (0.97)	-0.04 (1.04)	-0.23 (0.89)
医歯薬系	1416	0.18 (0.87)	0.33 (0.77)	0.26 (0.71)	0.02 (0.96)	0.28 (0.99)	0.30 (0.90)	-0.47 (0.80)
家政系	366	-0.18 (0.85)	0.03 (0.72)	0.20 (0.72)	-0.02 (0.94)	-0.15 (0.87)	0.16 (0.89)	-0.26 (0.93)
芸術系	678	-0.36 (0.89)	-0.21 (0.80)	0.34 (0.72)	0.01 (0.98)	-0.21 (0.94)	-0.08 (1.03)	-0.34 (0.84)
体育系	201	-0.01 (0.84)	-0.26 (0.77)	0.02 (0.73)	-0.31 (0.95)	-0.07 (0.96)	-0.27 (1.16)	-0.03 (0.91)
学部その他	676	-0.25 (0.92)	0.00 (0.83)	0.40 (0.69)	0.13 (1.00)	-0.23 (0.93)	0.10 (0.97)	-0.54 (0.79)
学部未定	1217	0.06 (0.88)	-0.15 (0.78)	-0.37 (0.80)	-0.14 (0.92)	-0.07 (0.91)	-0.22 (1.01)	0.51 (1.05)
F 値		46.8 **	63.7 **	107.3 **	73.0 **	145.5 **	31.5 **	141.4 **

** p<0.0001

造が分かれた。因子1は国語、社会、英語で負荷量が高く、文系学力と考えられる。また、因子2は数学、理科で負荷量が高いので理数系学力と考えられる。

分析では、これらの文系・理数系教科学力の2つの因子得点に加え、進学動機に関する学業志向動機とモラトリアム動機の2つの因子得点および進路意識に関する学歴志向、学習努力、進路展望の3つの計7つの因子得点を用いて、志望学部を選択するときどのような影響を与えているかを、一元配置の分散分析によって調べてみた(表II.6a)。その結果、「進路展望」「理数系学力」「モラトリアム動機」で高度に有意となった。つまり、志望進路を決定する際には、どのような進路展望をもつか、あるいは理数系学力の高低などが大きな影響力をもつことを確認することができた。

具体的な各学部のプロフィールは例えば、法経済系を志望する者は、文系学力が高く、高学歴志向をもって学習努力をしているが、モラトリアム志向が高く大学での進学目的が曖昧な状況にある。また、理工系を志望する者は、理数系学力が高く高学歴志向ではあるが進路展望の面で低い傾向にある。これに対し、医歯薬系を志望する者

は、理数系学力が高く、高学歴志向ではあるが将来の目標が明確であり、積極的に学習努力している、などの特徴を読み取ることができる。

しかし、このような特徴は、大学・短大進学希望者と専修学校進学希望者との間で差異があることが考えられる。そこで、分析では大学・短大進学希望者と専修学校進学希望者との2つの集団に分けて、それぞれの集団毎に特徴を詳細に調べてみることにした。また、特徴を記述するにあたり、類似した特徴を示す学部はまとめて要約することにした。ここでは、階層的クラスター分析(最遠距離法)によって要約する。

[大学・短大進学希望者]

表II.6bのデータにもとづいてクラスター分析を行った後、図II.5のようなデンドログラムを構成することができた。このデンドログラムから、まとまりの良さを考慮して3つのクラスターに分類した。また、分類されたクラスターの特徴を把握するため、各クラスターに含まれる学部についての進路意識等の平均値の大小をレーダーチャートで表した(図II.6)。図に示した円は各軸の値が0の点を結んだ基準円であり、各要因の得点が平均0、分散1のデータであることを考慮すると、集団の平均プロフィールを表したものと考え

表 II.6b 志望学部からみた各因子得点の平均値（大学・短大進学希望者）

	人数	学歴志向	学習努力	進路展望	文系学力	理系学力	学業志向動機	モラトリアム動機
(全体)	7821	0.20 (0.88)	0.30 (0.76)	-0.03 (0.80)	0.12 (1.00)	0.09 (1.03)	-0.02 (1.01)	0.14 (1.00)
法経済系	1169	0.40 (0.88)	0.37 (0.78)	-0.05 (0.80)	0.36 (1.01)	-0.02 (0.99)	-0.08 (1.11)	0.37 (1.06)
文学系	1553	0.21 (0.85)	0.35 (0.74)	0.11 (0.78)	0.45 (0.92)	-0.41 (0.90)	-0.02 (0.98)	0.35 (0.99)
教員養成系	808	0.08 (0.83)	0.42 (0.71)	0.30 (0.73)	0.19 (0.97)	-0.01 (0.95)	0.22 (0.90)	-0.18 (0.78)
理工系	1658	0.36 (0.83)	0.30 (0.78)	-0.17 (0.82)	-0.24 (0.97)	0.66 (0.99)	-0.09 (1.02)	0.15 (0.97)
農水産系	216	0.06 (0.95)	0.42 (0.74)	0.14 (0.77)	0.06 (1.04)	0.34 (0.95)	-0.17 (1.04)	-0.20 (0.90)
医歯薬系	846	0.40 (0.82)	0.56 (0.74)	0.25 (0.75)	0.03 (0.98)	0.43 (1.01)	0.24 (0.90)	-0.46 (0.79)
家政系	170	0.13 (0.84)	0.33 (0.64)	0.23 (0.67)	0.11 (0.98)	-0.17 (0.87)	0.14 (0.89)	-0.11 (0.95)
芸術系	254	-0.19 (0.90)	0.07 (0.80)	0.27 (0.79)	0.12 (1.04)	-0.17 (0.98)	-0.12 (1.03)	-0.21 (0.79)
体育系	147	0.04 (0.82)	-0.16 (0.75)	0.00 (0.74)	-0.31 (0.93)	0.01 (0.93)	-0.35 (1.16)	0.12 (0.93)
学部その他	293	0.04 (0.91)	0.42 (0.74)	0.35 (0.71)	0.38 (0.99)	-0.23 (0.95)	0.10 (0.97)	-0.28 (0.80)
学部未定	772	0.18 (0.85)	-0.07 (0.78)	-0.46 (0.80)	-0.12 (0.94)	-0.02 (0.91)	-0.27 (1.01)	0.77 (1.00)
F 値		23.3 **	41.2 **	68.9 **	58.3 **	123.6 **	25.6 **	96.2 **

** p<0.0001

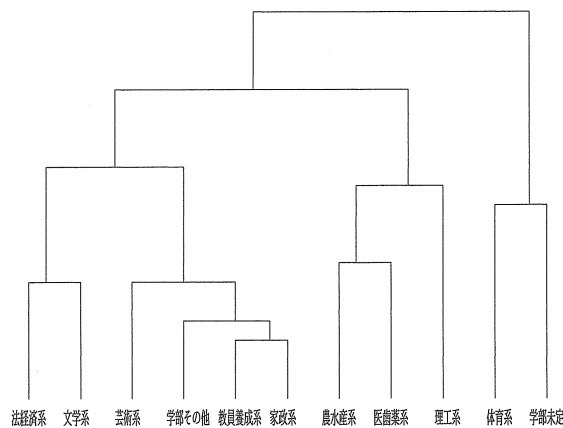


図 II.5 志望学部に関するデンドログラム
(大学・短大進学希望者)

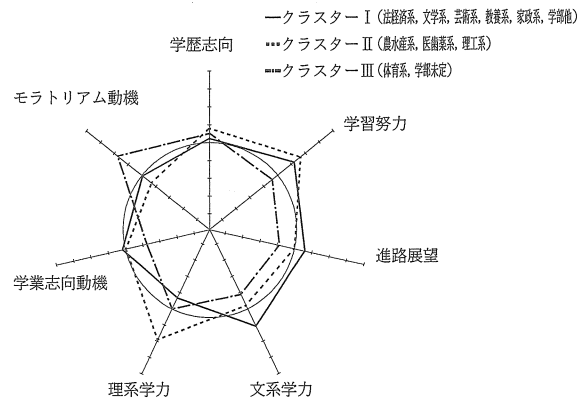


図 II.6 志望学部に関する各クラスターのプロフィール
(大学・短大進学希望者)

ることができる。

デンドログラムおよびレーダーチャートから、ここで分類した3つのクラスターの特徴を外観すると、始めにモラトリウム動機の高低によって2つのクラスターに大別され、さらにモラトリウム動機の低い学部群は文系と理系の2つのクラスターに分類される。つまり、学部の選択においては、まずモラトリウム動機の高低によって選択が決まり、モラトリウム動機の低い集団についてはさらに文系および理数系学力の高低によって次の選択が決まるという学部選択のプロセスが見える。

具体的な各クラスターの特徴を述べると、次の点が指摘できよう。

クラスターⅠ（法経済系、文学系、芸術系、教員養成系、家政系、学部その他）とクラスターⅡ（農水産系、医歯薬系、理工系）は教科学力に関する要因を除けば、ほぼ類似した傾向を示しており、学習努力が平均よりはやや高いことを除けば、ほぼ平均的なプロフィールを示している点が特徴である。教科学力について、クラスターⅠは文系学力が高く、逆にクラスターⅡは理数系学力が高くなっており、いずれのクラスターに所属するかは、文系学力が高いかあるいは理数系学力が高いかの違いが大きく影響している。

これに対し、クラスターⅢ（体育系、学部未定）は、他の2つのクラスターに比べ、モラトリウム動機を除き、全体的に形状は縮小しており、学習努力、進路展望、学業志向動機などの多数の要因が平均的プロフィールに比べ低くなっている。ただし、図Ⅱ.5で示すように体育系と学部未定の間には若干距離があることは注意しておかななくてはならない。体育系と学部未定との間で進路展望およびモラトリウム動機で差異が見られるが、その他の要因の平均値が類似していることから、両者は同一のクラスターとしてまとめられると考えられる。

〔専修学校進学希望者〕

大学・短大進学希望者と同様に表Ⅱ.6cのデータにもとづいて、3つのクラスターに分類しデンドログラムなどを作成し結果を要約した（図Ⅱ.7, 図Ⅱ.8）。レーダーチャートをみると、大学・短大進学希望者の場合に比べ、各要因が基準円内に収まっており、全体的に縮小された形状を示している。総じて進路意識（学歴志向、学習努力）は低く、日頃の目標へ向かっての努力は欠けるが、モラトリウム動機は低く、目的意識が比較的明確な状況にあるのが特徴である。

専科選択のプロセスはほぼ大学・短大進学希望者の場合と似ており、始めにモラトリウム動機の高低によって決まり、次いでモラトリウム動機の低い集団はさらに理数系学力、学歴志向、学習努力の高低によって決まる。大学・短大進学希望者との差異は、第2段階での決定において大学・短大進学希望者が文系・理数系学力だけであったのが、専修学校進学希望者の場合、学歴志向および学習努力が加わった点である。

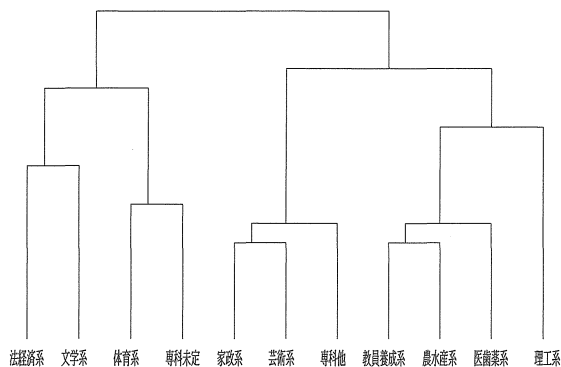
具体的な各クラスターの特徴を述べると次のようになる。

モラトリウム動機の高いクラスターとしてクラスターⅠ（法経済系、文学系、体育系、専科未定）がある。このクラスターは大学・短大進学希望者のクラスターⅢに該当するもので、法経済系、文学系が加わったものとなっている。これに対してクラスターⅡ（教員養成系、農水産系、医歯薬系、理工系）およびクラスターⅢ（家政系、芸術系、専科その他）は逆にモラトリウム動機は低く進路目標が比較的明確な集団となっている。そして、この2つのクラスターの差異は、学歴志向、学習努力、理数系学力で見られる。いずれもクラスターⅡがクラスターⅢに比べ高い値を示しており、クラスターⅡが比較的高い学歴志向と明確な進路目標をもち、またその目標に向かっての努力をしているのに対し、クラスターⅢは明確な進路目標はあるが学力あるいは学習努力などの点において低くなっているのが特徴である。

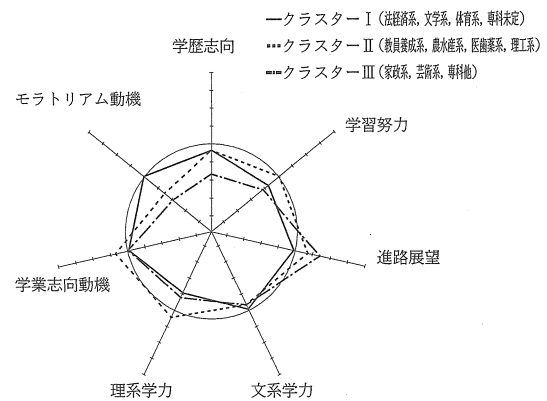
表Ⅱ.6c 志望学部からみた各因子得点の平均値（専修学校進学希望者）

	人数	学歴志向	学習努力	進路展望	文系学力	理系学力	学業志向動機	モラトリアム動機
(全体)	3644	-0.18 (0.90)	-0.15 (0.80)	0.17 (0.77)	-0.07 (0.96)	-0.09 (0.96)	0.05 (0.97)	-0.30 (0.93)
法経済系	216	0.08 (0.90)	0.02 (0.83)	-0.04 (0.79)	0.02 (1.03)	-0.10 (1.01)	0.05 (1.08)	0.18 (1.10)
文学系	386	-0.09 (0.87)	0.05 (0.77)	0.17 (0.78)	0.36 (0.88)	-0.47 (0.89)	0.03 (0.96)	0.00 (0.87)
教員養成系	273	-0.10 (0.87)	-0.01 (0.77)	0.21 (0.74)	-0.08 (0.90)	-0.10 (0.90)	0.22 (0.81)	-0.31 (0.84)
理工系	572	-0.12 (0.94)	-0.20 (0.83)	-0.10 (0.81)	-0.35 (0.97)	0.37 (0.99)	0.04 (1.00)	-0.32 (0.99)
農水産系	67	-0.12 (0.85)	0.16 (0.80)	0.21 (0.77)	0.07 (0.96)	0.10 (1.01)	0.20 (0.98)	-0.29 (0.81)
医歯薬系	587	-0.02 (0.86)	0.16 (0.76)	0.40 (0.66)	0.00 (0.94)	0.06 (0.93)	0.24 (0.87)	-0.55 (0.80)
家政系	200	-0.43 (0.79)	-0.21 (0.73)	0.17 (0.76)	-0.13 (0.90)	-0.15 (0.88)	0.09 (0.92)	-0.41 (0.89)
芸術系	430	-0.50 (0.88)	-0.37 (0.78)	0.31 (0.68)	-0.06 (0.94)	-0.24 (0.92)	-0.13 (0.99)	-0.40 (0.83)
体育系	57	-0.26 (0.81)	-0.48 (0.80)	-0.07 (0.78)	-0.29 (1.02)	-0.33 (0.98)	-0.09 (0.90)	-0.26 (0.77)
専科その他	396	-0.45 (0.88)	-0.27 (0.79)	0.41 (0.69)	-0.06 (0.98)	-0.22 (0.92)	0.00 (0.95)	-0.74 (0.71)
専科未定	461	-0.21 (0.88)	-0.40 (0.74)	-0.27 (0.79)	-0.16 (0.90)	-0.17 (0.90)	-0.08 (0.98)	0.11 (1.02)
F 値		15.7 **	25.1 **	35.6 **	14.5 **	24.6 **	7.1	32.2 **

** p<0.0001



図Ⅱ.7 志望学部に関するデンドログラム
(専修学校進学希望者)



図Ⅱ.8 志望学部に関する各クラスターのプロフィール
(専修学校進学希望者)

表II.7a 志望職業からみた各因子得点の平均値 (全体)

志望職業	人数	学歴志向	学習努力	進路展望	文系学力	理系学力	学業志向動機	モラトリアム動機
事務	625	0.30 (0.83)	0.10 (0.76)	-0.17 (0.79)	0.13 (0.97)	0.06 (1.01)	-0.07 (1.01)	0.38 (1.05)
販売	280	0.02 (0.95)	-0.02 (0.83)	-0.01 (0.82)	0.04 (0.98)	-0.03 (0.99)	-0.30 (1.08)	0.32 (1.10)
サービス	887	-0.09 (0.89)	-0.03 (0.81)	0.14 (0.75)	0.07 (0.99)	-0.20 (0.92)	0.04 (0.98)	-0.11 (0.98)
技術技能	1489	0.17 (0.89)	0.09 (0.82)	-0.14 (0.79)	-0.27 (0.96)	0.43 (0.99)	0.05 (0.92)	-0.19 (0.92)
教育研究	1924	0.02 (0.87)	0.34 (0.73)	0.19 (0.72)	0.18 (0.98)	0.00 (0.98)	0.16 (0.90)	-0.16 (0.82)
医療	1671	0.15 (0.87)	0.32 (0.76)	0.27 (0.71)	0.01 (0.97)	0.23 (0.99)	0.30 (0.86)	-0.47 (0.80)
戸外	94	-0.43 (0.93)	0.22 (0.82)	0.09 (0.76)	0.07 (1.05)	0.12 (1.00)	-0.10 (1.00)	-0.03 (1.03)
芸術	853	-0.27 (0.91)	-0.07 (0.82)	0.29 (0.72)	0.05 (1.00)	-0.22 (0.98)	-0.12 (1.00)	0.09 (0.96)
公務員	1020	0.41 (0.84)	0.27 (0.77)	-0.14 (0.77)	0.22 (1.00)	0.01 (0.99)	-0.03 (0.98)	0.26 (0.99)
職業その他	895	-0.09 (0.98)	0.15 (0.80)	0.34 (0.74)	0.25 (1.05)	-0.17 (1.05)	-0.01 (1.06)	-0.27 (0.89)
職未定	1657	0.09 (0.90)	0.04 (0.80)	-0.42 (0.78)	0.00 (0.96)	-0.10 (0.99)	-0.27 (1.05)	0.69 (1.02)
F 値		49.3 **	38.2 **	130.0 **	27.0 **	49.1 **	38.1 **	176.6 **

** p<0.0001

5.3 志望職業の選択に関わる要因

各志望職業について先の志望学部で用いた7つの要因の平均値を示した(表II.7a)。各要因毎にF値も示してある。F値の値から、「進路展望」および「モラトリアム動機」が高度に有意となっている。先の学部の場合と同じ要因が高度に有意となったことを考えると、この2つの要因は学部および職業を決定するときに重要な影響を与えていることが分かる。

次に、大学・短大進学希望者と専修学校進学希望者に分け、志望学部の場合と同様にクラスター分析を行った。

〔大学・短大進学希望者〕

表II.7bのデータにもとづいてデンドログラムにより、3つのクラスターに分類した(図II.9, 図II.10)。構造的には、モラトリアム動機と進路展望の高低によってクラスターI(販売, 事務, 公務員, 職未定)とクラスターII(サービス, 芸術, 職業その他, 教育研究, 戸外), クラスターIII(技術技能, 医療)に分かれ、さらに理数系学力の高低によってクラスターIIとIIIに分かれてい

る。職業選択のプロセスもやはり学部選択の場合と同様に、進路展望, 理数系学力, モラトリアム動機の高低によって大きく分かれている。ただし、学部選択の場合と異なる点は、職業選択の場合にはさらに学歴志向の高低が選択する職業に影響を与えている点であろう。クラスターIとクラスターII・IIIの間では学歴志向において大きな差異が見受けられる。このことは、職業選択が学歴とは無関係には行われないことを物語っている。

具体的な各クラスターの特徴を述べると次のようになろう。

クラスターIは、モラトリアム動機が最も高く(逆に進路展望は最も低い)、進路に対する目標は明確ではない。また、このクラスターは高学歴志向にありやや文系学力が高いのが特徴である。

クラスターIIは、総じて平均的である。クラスターIIIは、理数系学力が高いのが特徴である。またこのクラスターは比較的学歴志向も高く、学業志向動機も高くまた学習努力もしているのが特徴である。

表 II, 7b 志望職業からみた各因子得点の平均値 (大学・短大進学希望者)

	人数	学歴志向	学習努力	進路展望	文系学力	理系学力	学業志向動機	モラトリアム動機
(全体)	7821	0.20 (0.88)	0.30 (0.76)	-0.03 (0.80)	0.12 (1.00)	0.09 (1.03)	-0.02 (1.01)	0.14 (1.00)
事務	479	0.42 (0.79)	0.19 (0.76)	-0.20 (0.81)	0.17 (0.96)	0.05 (1.00)	-0.13 (1.05)	0.54 (1.02)
販売	196	0.18 (0.89)	0.11 (0.79)	-0.09 (0.82)	0.08 (0.97)	-0.03 (1.00)	-0.31 (1.13)	0.55 (1.07)
サービス	409	0.20 (0.86)	0.32 (0.77)	0.12 (0.77)	0.23 (1.01)	-0.18 (0.95)	-0.06 (1.05)	-0.25 (0.95)
技術技能	980	0.36 (0.82)	0.29 (0.78)	-0.10 (0.80)	-0.24 (0.96)	0.57 (0.99)	-0.01 (0.96)	-0.08 (0.88)
教育研究	1580	0.14 (0.84)	0.45 (0.71)	0.24 (0.74)	0.23 (0.99)	0.03 (0.99)	0.14 (0.92)	-0.14 (0.81)
医療	990	0.38 (0.81)	0.54 (0.74)	0.27 (0.75)	0.01 (0.99)	0.39 (1.02)	0.25 (0.92)	-0.44 (0.79)
戸外	69	-0.43 (0.85)	0.20 (0.83)	0.09 (0.86)	0.07 (1.05)	0.09 (0.98)	-0.34 (0.97)	-0.01 (1.04)
芸術	416	-0.08 (0.89)	0.18 (0.78)	0.25 (0.75)	0.14 (1.03)	-0.16 (1.02)	-0.16 (1.02)	0.14 (0.95)
公務員	858	0.50 (0.83)	0.39 (0.75)	-0.07 (0.77)	0.27 (0.99)	0.03 (0.98)	-0.03 (1.00)	0.30 (0.99)
職その他	572	0.17 (0.94)	0.42 (0.77)	0.35 (0.77)	0.39 (1.06)	-0.11 (1.07)	-0.01 (1.10)	-0.11 (0.89)
職未定	1319	0.16 (0.88)	0.06 (0.80)	-0.43 (0.79)	0.03 (0.97)	-0.08 (1.00)	-0.27 (1.09)	0.82 (1.01)
F 値		28.8 **	34.4 **	90.4 **	24.0 **	44.7 **	31.8 **	137.5 **

** p<0.0001

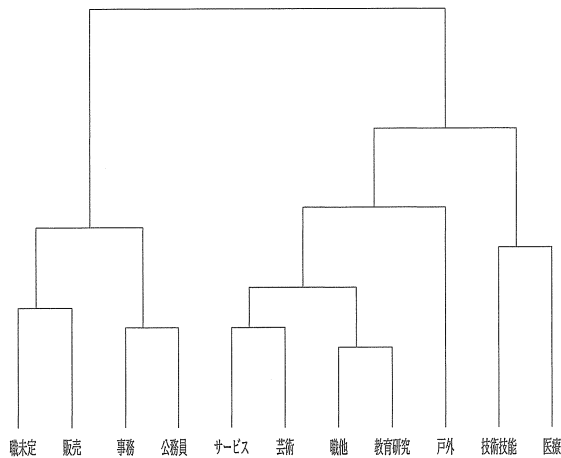


図 II.9 志望職業に関するデンドログラム
(大学・短大進学希望者)

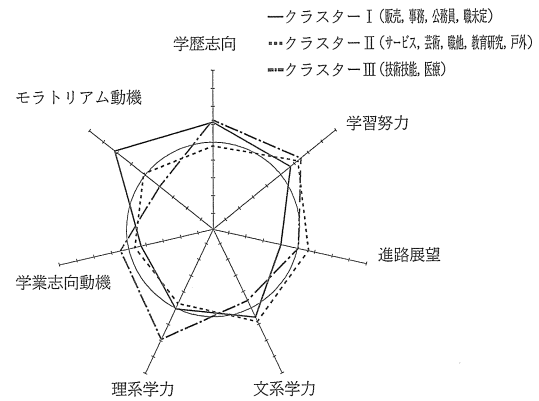


図 II.10 志望職業に関する各クラスターのプロフィール
(大学・短大進学希望者)

表 II.7c 志望職業からみた各因子得点の平均値（専修学校進学希望者）

	人数	学歴志向	学習努力	進路展望	文系学力	理系学力	学業志向動機	モラトリアム動機
(全体)	3644	-0.18 (0.90)	-0.15 (0.80)	0.17 (0.77)	-0.07 (0.96)	-0.09 (0.96)	0.05 (0.97)	-0.30 (0.93)
事務	147	-0.02 (0.86)	-0.09 (0.80)	0.05 (0.77)	-0.01 (0.98)	0.09 (1.02)	0.18 (0.90)	-0.10 (1.03)
販売	93	-0.31 (0.98)	-0.30 (0.83)	0.14 (0.77)	-0.06 (0.99)	-0.03 (0.99)	-0.26 (1.05)	-0.08 (1.04)
サービス	485	-0.35 (0.85)	-0.31 (0.78)	0.16 (0.76)	-0.06 (0.96)	-0.20 (0.89)	0.08 (0.95)	-0.42 (0.89)
技術技能	531	-0.13 (0.91)	-0.27 (0.83)	-0.15 (0.80)	-0.30 (0.97)	0.17 (0.96)	0.04 (0.95)	-0.43 (0.92)
教育研究	378	-0.16 (0.87)	0.03 (0.77)	0.23 (0.71)	-0.03 (0.90)	-0.10 (0.95)	0.12 (0.89)	-0.30 (0.82)
医療	699	-0.05 (0.86)	0.16 (0.75)	0.41 (0.65)	0.00 (0.96)	0.01 (0.91)	0.22 (0.87)	-0.58 (0.78)
戸外	26	-0.26 (1.06)	0.03 (0.88)	0.19 (0.62)	0.07 (1.08)	0.20 (1.05)	0.52 (0.95)	-0.03 (0.91)
芸術	443	-0.45 (0.90)	-0.29 (0.81)	0.29 (0.69)	-0.04 (0.96)	-0.27 (0.95)	-0.13 (1.03)	-0.27 (0.91)
公務員	172	0.19 (0.84)	-0.06 (0.82)	-0.11 (0.83)	-0.02 (1.01)	-0.10 (1.06)	0.00 (1.01)	0.12 (0.99)
職その他	337	-0.45 (0.92)	-0.19 (0.78)	0.38 (0.73)	0.03 (0.98)	-0.28 (1.00)	-0.10 (1.06)	-0.50 (0.86)
職未定	366	-0.14 (0.87)	-0.30 (0.76)	-0.31 (0.79)	-0.10 (0.91)	-0.15 (0.94)	-0.06 (0.97)	0.35 (0.94)
F 値		14.1 **	19.2 **	38.4 **	4.5	9.4	8.7	31.8 **

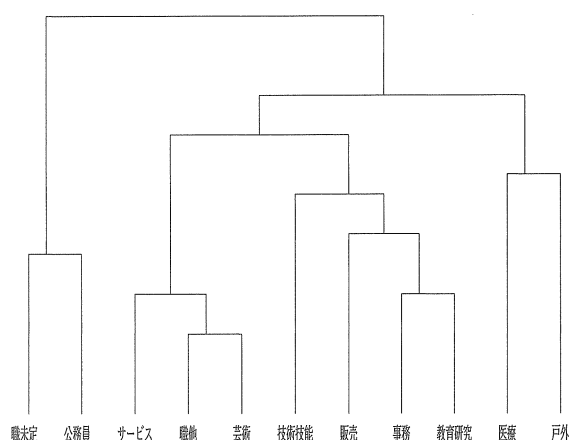


図 II.11 志望職業に関するデンドログラム（専修学校進学希望者）

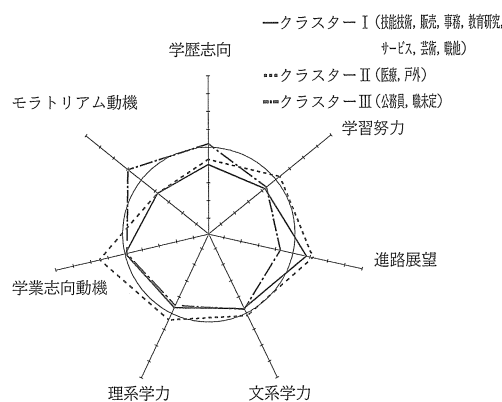


図 II.12 志望職業に関する各クラスターのプロフィール（専修学校進学希望者）

〔専修学校進学希望者〕

表 II.7c のデータにもとづいて 3 つのクラスターに分類し、専修学校進学希望者の志望職業の選択に関わる要因について調べてみた（図 II.11, 図 II.12）。全体的に縮小した形状にあり、一つのクラスターに多数（7 つの職種）が含まれていることを考えると、職種の差異が明確でない。そのことを考慮しながら、クラスターの構造をみると、まず始めにモラトリアム動機および進路展望の高低によって分かれ、次いでモラトリアム動機が低い集団については、さらに学習努力および学業志向動機の高低によって分かれている。専修学校進

学希望者の場合には、資格取得の有無や日頃の学習努力が職業選択に強く影響していることが分かる。具体的な各クラスターの特徴を述べると次のようになる。

クラスター I（技術・技能、販売、事務、教育研究、サービス、芸術、職業その他）は、平均的である。クラスター II（医療、戸外）は、学業志向動機が最も高く、また学習努力をしているクラスターである。クラスター III（公務員、職未定）は、学歴志向とモラトリアム動機が 3 つのクラスターの中で最も高く、学習努力、進路展望などの側面で劣っている。

6. 進路意識未成熟者の分析

進路意識の持ち方が、進学動機や志望する学部や職業の選択に大きな影響を与えることを確認できたが、特に進路意識の低い者（進路意識未成熟者）がどのような学校に多く、また将来のことについてどのような考え方をもっているのか、あるいはどのような進路を考えているのかを確認することは、進路指導を実戦していく上で重要である。本章では、進路意識のうち「学習努力」および「進路展望」が特に低い者を進路意識未成熟者として定義し、その集団を対象にして分析を試みる。

6.1 進路意識未成熟者の特徴

対象となる集団は、「学習努力」因子得点が－1点以下でかつ「進路展望」因子得点が－1点以下の者とした。該当者数は、全データ約14,000人のうち3.6%にあたる479人であった。この集団の進路意識のプロフィールを図II.13に示す。学習努力、進路展望は低得点であるが、分析でとりあげた全ての要因が、基準円より内にあり、集団全体の平均より低い状況にあることが分かる。

(1) 学年・性・学校組織からみた特徴

学年経過からみると、高校1年、2年、3年に従って減少してはいるが、最終学年の高校3年においても100人余りもいる（表II.8）。また、性別

では圧倒的に男子に多い。進路意識の成熟過程からみて、進路成熟は女子に比べ男子の方が遅いとの指摘があるが（柳井他,1989）、このことをよく表している。

表II.8 学年からみた進路意識未成熟者

性	高1	高2	高3	計
男	158 (41.2%)	139 (36.2%)	87 (22.6%)	384 (80.2%)
女	47 (49.5)	30 (31.6)	18 (19.0)	95 (19.8)
計	205 (42.8)	169 (35.3)	105 (21.9)	479 (100.0)

一方、学校組織からみた場合、進路意識未成熟者がクラスに占める割合は、381校のうち約75%にあたる284校が1クラス当たり5%以下であるが、20%以上の学校も5校ある（表II.9）。また、普通科に比べ職業科の方に多く、進学少数校に集中している。

なお、進路未成熟者の割合が20%以上の学校5校についてどのような地域に所在するか調べたところ、地域的な偏りはなく全国に散在していた。

表II.9 高校における進路意識未成熟者の占める割合

設置	5%以下	5～20%	20%以上	計
普通科	262 (78.9%)	67 (20.2%)	3 (0.9%)	332 (87.1%)
職業科	22 (44.9)	25 (51.0)	2 (4.1)	49 (12.9)
計	284 (74.5)	92 (24.2)	5 (1.3)	381 (100.0)

*1校あたり平均39人（1クラス分）

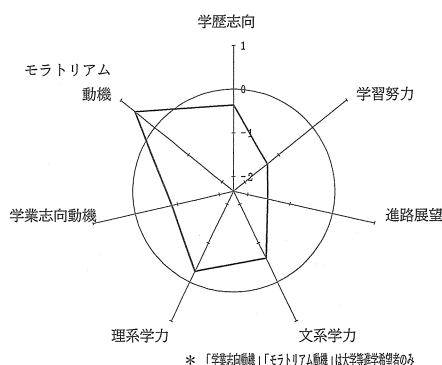
(2) 学業成績

進路意識未成熟者の文系・理数系学力が全国平均より低いことは確認できたが、実際、どの程度の自己評価をしているのか、実際の自己評価結果によって確認してみることにした。結果をみると、5教科すべてにおいて学内で下位であると認識している者が全体の1/4近くもあり、成績下位者が多いことを改めて確認することができた（図II.14）。そこで、進路意識も低く、また成績も下位であると考えている者が、どのような進路を描いているのか、次に進路意識未成熟者の進路の考え方について調べてみよう。

6.2 進路意識未成熟者の進路に対する考え方

(1) 能力・努力・運

将来の進路を左右するものとして、生徒が能



図II.13 進路意識未成熟者の進路意識のプロフィール

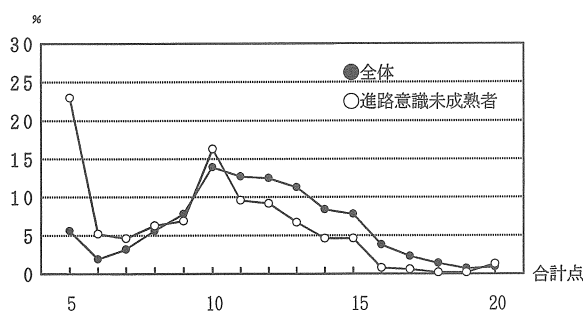


図 II.14 進路意識未成熟者の5教科自己評価の合計点の分布

力、努力、運の3つのうちどれが最も影響を与えているかを調べたところ図 II.15のような結果を得た。図には進路未成熟者と全体とを比較したものを示している。結果をみると、進路未成熟者は能力が最も影響を与えている者が39%、努力が25%、運が36%であった。一方、全体では能力が31%、努力が50%、運が19%であった。

進路意識未成熟者は全体に比べて能力や運を重視する者の割合は高く、逆に努力を重視する者の割合は全体の方が高いことが分かる。ワイナー(1979)は原因帰属理論の中で能力や運などは統制不能な要因(自分の力では左右することのできないもの)、また努力は統制可能な要因(自分の力で左右することができるもの)と定義しているが、この考え方にたてば、進路未成熟者は全体に比べ能力や運などの統制不能な要因つまり自分で

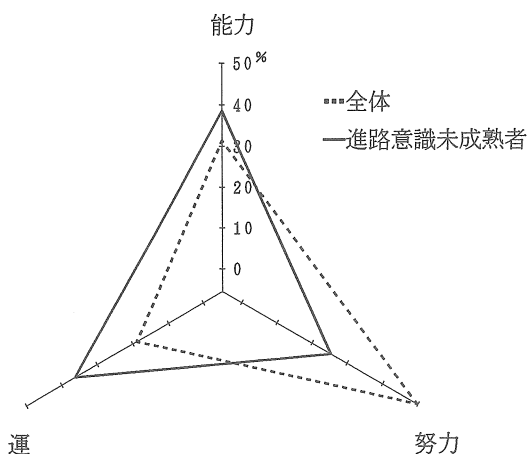


図 II.15 将来の進路を決定する際に影響するもの

はどうにもならない要因によって、将来を決定する傾向にあることが示唆される。

(2) 進路に関する期待・感情

次に、進路に関する期待・感情について、進路未成熟者の特徴を調べてみた(図 II.16)。希望進路の実現可能性については、進路未成熟者は全体に比べ可能性は低い(全体:32.9%,進未:10.55%)と考えているが、自己の興味・関心を重視した進路決定の可能性は逆に高い(全体:13.8%,進未:24.2%)と考えている。ただし、そのための努力をしようとする意識が欠けている(全体:84.6%,進未:57.2%)。

能力、運といった統制不能な要因を重視する進路未成熟者は、興味・関心を重視した希望進路を目指しているが、その可能性は低いことを自覚しており、また希望進路実現のための努力が欠如した状況にあることが推測される。

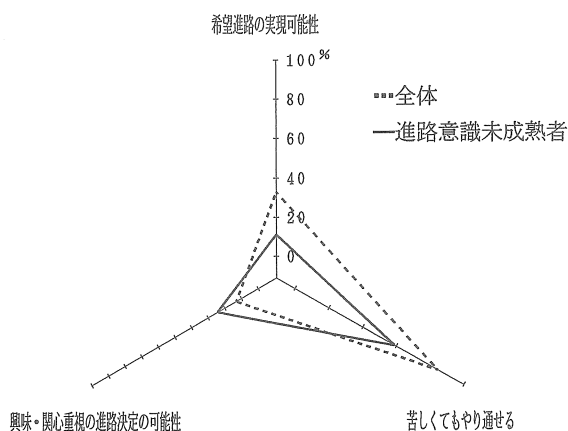


図 II.16 進路に対する期待・感情

6.3 進路先

図 II.17に進路先を示した。全体に比べ、進路未成熟者は大学等の高等教育機関への進学希望者

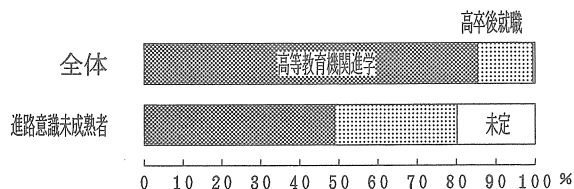
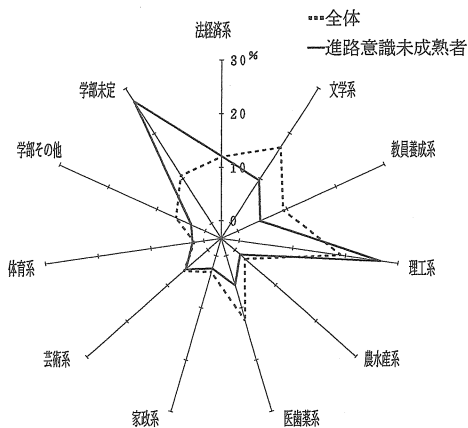


図 II.17 進路先

は少なく、高卒後就職あるいは進路未定者が多い。

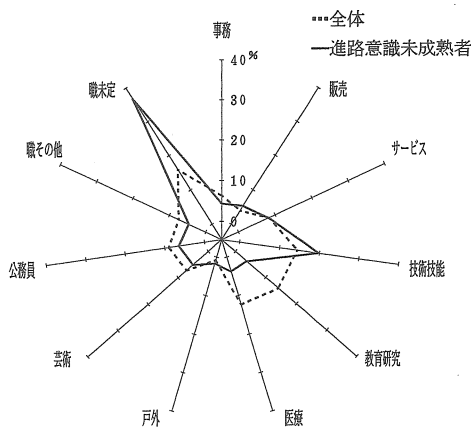
では、具体的に進路未成熟者はどのような進路を志望しているのだろうか。ここでは、大学等進学希望者のみを対象にして、全体との比較で評価してみた(図Ⅱ.18)。

学部未定者が最も多く(27.1%)、次いで理工系(26.7%)、法経済系(12.1%)の順となっている。全体との比較においては、学部未定はもちろん教員養成系や医歯薬系など将来の職業と関連の深い学部への志望者の割合が低く、将来に対する目的意識があいまいな状況にある。



図Ⅱ.18 志望学部

また、志望職業(図Ⅱ.19)をみると、学部と同様に職未定者が圧倒的に多く(36.9%)、ここでも進路に関する問題を残したままである。



図Ⅱ.19 志望職業

Ⅲ. 結果の要約

「学歴志向」「学習努力」「進路展望」の3つの進路意識の側面を中心に、それらが進学動機、志望学部、志望職業などとの関連で、どのような規定力をもつか調べてきた。その結果は以下のように要約することができよう。

1. 進路の選択

大学等へ進学するかあるいは高校卒業後就職するかの進路の選択を規定する問題については、過去に多くの研究がなされてきた。本研究では、過去に得られた研究結果について再確認を行うために改めて分析を試みた。

ここでは進路選択に関する規定要因として、個人的要因(学年、性、成績、家庭背景)と組織的要因(高校タイプ、学科、設置、進学指導)と大きく2つに分類した。個人的要因については「成績」と「親の期待」が、また組織的要因では「高校タイプ」と「学科」が強く規定していることが確認できた。この結果は既存の研究結果と一致しており、今なお生徒の進路選択の要因に変わりがなかったことが再確認できた。

2. 進路意識の形成に及ぼす影響

進路意識を表す概念として「学歴志向」「学習努力」「進路展望」の3つをとりあげ、それらがどのような要因によって規定されるかを調べた。その結果、全てにおいて親の期待が強く関わっていることが確認された。学業成績あるいは高校タイプの差異が、進路意識の形成においてももちろん影響するであろうことは推測されたが、親の期待が同等の強さで影響を与えていることは注目しなくてはならない。学校組織が生徒に対し、将来の進路に関連した様々な環境を設定する努力をしたとしても、その生徒の親の意識がどのようなものであるかによって大きく左右する可能性がある。親の期待がなければ、進路に対しての目的意識も薄れ、学習努力もせず、しいては進路の決定にも強く影響を及ぼすことも予想される。そのような事態を避ける上でも、特に父母に対して進路に関する様々な情報を提供することにより、父母の意識を高めることは大切である。

また、ここで取り上げた「進路展望」は、全ての個人的要因と関連していたが、組織的要因の影響は弱いことが確認できた。進路展望が自己の生き方や能力・適性など個々の生徒の特性と密接な関連があることを考えると、組織的な関わりが小さくなることは当然ではあるが、その中で特に個々の生徒に対して進路指導を行う進路指導体制のあり方が必ずしも規定力となっていない点は注意しなくてはならない。

3. 進路意識と進学動機との関係

全ての進路意識が、学業志向動機と正の相関をもっていた。また、男女差も大きく、男子に比べ女子の方が学業志向動機が高いことが認められた。逆に、モラトリアム動機は学歴志向を除いた学習努力、進路展望との間で負の相関にあった。2つの動機間で負の相関があったことを考えると妥当な結果ではある。

なお、学歴志向がモラトリアム動機と正の相関をもったことは意外であった。学歴志向が高い者ほどモラトリアム動機が高いという結果である。この点については、具体的な志望学部や志望職業と関連するが、特に法経済系への進学や事務系、公務員などの一般職を希望している集団によるものと推測される。このような集団は、学歴志向は強いがモラトリアム動機も高く、結果を支持する特徴をもっている。また、この集団は進路展望も低く、いわゆる典型的な学歴社会の申し子とも呼べる集団と考えることができよう。

4. 「努力」の考え方

「何がなんでも第一志望に合格するまでがんばる」という集団は全体の半数にも満たず、半数以上が「第一志望にこだわらず、ほどほどのところへ進学し、大学をエンジョイしたい」と考えている。いわば「努力」に対してさめた意識あるいは「努力」を合理的に考える集団が増えてきている状況にある。ただし、その考え方は、日頃の学習努力によって大きく異なる。日頃の学習努力に欠ける者ほど、青春をエンジョイしたいという意識は強く、逆に日頃から学習努力をしている者ほど志望校に対する目標が明確である。

5. 志望学部

進路意識や進路動機あるいは学業成績と志望学部との関連を調べてみた。その結果、全般に、進路展望、理数系学力およびモラトリアム動機の差異が学部選択において重要な影響を与えることが分かった。

次に、その影響が大学・短大進学希望者と専修学校進学希望者によってどの程度違いがあるかをさらに調べてみた。

クラスター分析の結果、大学・短大等進学希望者の場合、モラトリアム動機および学業成績（文系学力、理数系学力）がクラスターを構成する上で大きな影響を与えていた。ここでは、3つのクラスターに分類したが、クラスターⅠ（法経済系、文学系、芸術系、教員養成系、家政系、学部その他）とクラスターⅡ（農水産系、医歯薬系、理工系）は文系学力と理数系学力の差異によって、またクラスターⅢ（学部未定、体育系）はモラトリアム動機によって分類された。この結果は、一般に言われているように多数の学部が文系・理系の学力の高低によって選択される状況をよく表したものと言えよう。

その中で、特に「進路展望」に注目して学部レベルで考察してみたい。先にも述べたように、進路展望が自己の生き方や能力・適性など個々の生徒の特性と密接な関連があることを考えると、進路決定において重要な要因である。結果をみると、進路展望の高い得点を有する学部としては、教員養成系、医歯薬系、芸術系および学部その他などがあり、逆に負の値をもつものとして、法経済系および理工系がある。教員養成系などの学部はいずれも職業と密接な関連があり、進路の道筋を立てることが容易な学部であり、得点が高くなることは容易に想像できるが、特に理工系において得点が低く現れていることは意外であった。理工系学部は、技術・技能に関連した職業と近い関係にあり、比較的進路展望が立てやすい学部と思われたが、そのような結果とはなっていない。おそらく、進路を決める際、理数系学力が得意＝理工系といった短絡した図式が生徒の頭の中にイメージ化され、「一になりたい」という具体的な将来の職業のイメージがないままに表出した結果ではないかと想像される。同様な短絡的な図式が法

経済系志望者にも見受けられる。これらの学部志望者の割合が、大学・短大進学希望者全体の35%以上を占めていることを考えると、学力だけではない進路指導のあり方が改めて問われる。

専修学校進学希望者が専科を決定するプロセスはほぼ大学・短大進学希望者と同様な図式が見い出された。この集団の特徴は、総じて大学・短大進学希望者に比べ学歴志向は低く、日頃の学習努力に欠け学力は低いが、モラトリアム動機は低く目的意識が比較的明確な状況にあるのが特徴である。学歴が地位や報酬を保障する時代から先行き不透明な時代へと変化しつつある中、資格や免許あるいは実践的な技術・技能などを獲得することにより社会での存在価値を見出すための一つの選択肢として貴重な役割を果たしていると考えられる。

6. 志望職業

職業の選択においても、進路展望、理数系学力、モラトリアム動機が強く影響することが分かった。大学・短大進学希望者の場合には、さらに学歴志向の高低も職業選択に影響しており、専修学校進学希望者の場合には、学習努力や学業志向動機（特に資格や免許取得）などが職業選択に関わっていた。

その中で、進路展望を中心に志望職業の特徴を探ってみると、職未定を含め、事務、販売、技術・技能、公務員を志望する者は他の職業を志望する者より進路展望が低い状況にあった。全体の約45%を占めている。職業選択が自己実現の追求過程として考えるならば、そこには自己の考え方や興味・関心あるいは適性などが凝縮して現れてはならない。果たして、このうち何人の生徒がこれらの職業について理解し、自己の考え方や興味・関心に沿って志望しているのだろうか。

7. 進路意識未成熟者について

進路意識が未成熟な集団について改めて分析を試みた。集団全体の4%程度であるが、この集団の特徴は、進路に関連する全ての指標に関して全体的にネガティブな状況にあった。教科成績についても5教科全てにおいて下位に位置する者が多く、希望進路実現可能性の低いことも自覚しており、将来の進路を統制不能な能力や運によって決

定するといった考え方をもっている。そして、そのような者は男子で多く、また普通科に比べ職業科に多く、進学少数校に集中していた。

IV. 総合討議

進路選択プロセスは大きく2つの段階に分けて考えることができる。第1段階は、大学等の高等教育機関に進学するかあるいは高校卒業後に就職するかの大きく二者択一の決定の段階である。第2段階は、選択した進路に対して具体的にどのような学部あるいは職業を選択するかを決定する段階である。いずれの段階でも、選択するのは生徒自身であり、生徒の考え方や興味・関心、能力など個人の特性が反映したものでなくてはならないが、実際には家庭、学校、社会、友人など生徒を取り巻く環境の違いに影響を受けながら選択が行われる。

分析では、個人的要因と組織的要因とを取り上げ、それらが各進路選択段階でどのような影響を与えるかを調べてみた。その結果、第1段階での決定においては、個人的な要因として成績と親の期待が、また組織的には進学校か非進学校あるいは普通科か職業科かの所属の違いが大きく影響していることが分かった。親の期待は非進学校よりも進学校で、また職業科よりも普通科で高いということを見ると、どの学校に所属するかが、進路分化の上で大きな役割を果たしていることは否めない。この点に関しては多くの先行研究で知られているところである。

しかし、その所属する学校によって、具体的な学部や職業が規定されるのであろうか。高等教育機関への進学を希望している者の第2段階における学部の選択に与える要因を調べてみたが、分析結果は否定的な結果となっていた。どの学部へ進むかは、個々の生徒の考え方や生き方あるいは能力・適性と密接に関連していることもあり、所属する学校組織の影響は小さく、学歴志向、成績、進路展望、モラトリアム動機の個人的要因が支配的であった。そして、これらの要因によって学部の特徴をよく表すことができた。例えば、典型的な例として法経済系を志望する者の特徴をみると、学歴志向は高く文系学力は高いが、進路展望は低くモラトリアム動機も高い。逆に医歯薬系を

志望している者は、理数系学力や進路展望が高く、逆にモラトリアム動機は非常に低くなっており、よく学部の特徴を表した結果となっている。同様な特徴は、大学等へ進学するかあるいは専修学校へ進学するかによっても違いが見られる。専修学校へ進学を希望している集団は、総じて学歴志向や学力は低い、進路展望は高く将来に対しての方向付けが堅実であるのに対し、大学等へ進学を希望している集団はその逆の様相を示していた。進学校が多く、著名な大学への進学者を輩出していることは事実ではあるが、具体的な学部の選択段階では、そのような進学校か非進学校かの組織の違いによる影響は小さく、あくまでも個々の問題として捉える必要があろう。

進路意識の分析の中で、学歴志向のもつ意味について調べてきた。ここでは学歴の効用として、主に社会的地位、安定した職業の2側面から捉えた。この点に関して、高等教育特に大学等への進学希望者はもちろん高い学歴志向の傾向が見られたが、その高さは志望する学部によって差異があることを理解しておかなければならない。法経済系、文学系、理工系、医歯薬系がその代表的な学部ではあるが、教員養成系を含むその他の多くの学部を志望する者は、それほど高い学歴志向をもっているわけではない。この代表的な学部のうち、医歯薬系を除く学部は、学力によってのみ進路を決定している傾向が見られる。法経済系、文学系は文系学力が高いために、理工系は理数系学力が高いために進路を決定している。いずれも将来の進路展望に対する意識は低く、大学へ入学してから将来を考えるという構造が見えてくる。特に理工系志望者の進路展望の低さは以前には見られなかった(1960年代の理工系ブーム)特徴である。将来の職業イメージが明確ではなく(将来は技術系へ就職したいがどのような職業に就きたいかのイメージが不明)、進路未成熟な状況にあることが推測される。

また、職業との関連から見ると、事務、公務員へ就くことを希望している者が高く、技術・技能へ就く者にもその傾向がある。これらの職業は、他の職業に比べ地位や階級に関わりの強い職業である。その意味では、学歴効用と密接に関連した職業と言えよう。従って、そこから見えてくる学歴志向の主たるルートは法経済系・文学系⇒事

務・公務員とやや弱い、理工系⇒技術・技能の流れである。

成績だけではなく、その他の個人のもつ興味・関心や適性などの特性を大切にする必要がある、という意見をよく聞く。しかし、個人のもつ特性は成績とは関わりのない独立したものか考えると、こと進路に関してはそうではない。進路意識が未成熟な者に関する分析を通して、多くの者が成績が下位の者であり、また学習努力への意欲が低い状況にあった。学校教育を通して、生徒は努力の大切さを学ぶが、その努力は、将来の目標への到達と密接に関わってくるものである。もし、目標への到達が不可能であったとするならば、あるいは目標自体が不明の場合には必然的に努力の効用はなくなり、そこに価値を見出せなくなる。その結果は成績の面にも反映するであろう。実際、進路意識未成熟者は進路未定の者が多いことを考えると、まさにそのような目標喪失の状況に置かれていると言わざるをえない。

初頭でもふれたように、「生徒はみずから自己の生き方や将来への展望をもち進路を決定しているのであろうか」「進路の選択にあたっては、学力向上はもちろんのこと、その目標に向かっての努力はなされているのであろうか」という問いに対して、選択する進路の違いによって多様な進路意識の持ち方が見られた。個々の生徒の進路意識に則したきめ細かな進路指導が望まれる。

参考文献

- 天野郁夫 試験の学歴 リクルート 1986
 天野郁夫・河上婦志子他 進路分化の規定要因とその変動 東京大学教育学部紀要23巻, 1-44, 1983
 大学入試センター 近年における教育環境の変化が進学志望者に及ぼす影響に関する研究 1996
 岡上克義 進学志望の意志決定過程に関する研究 教育心理研究, 第32巻, 1号 59-63, 1984 宮内博編 学校進路指導概論 文雅堂銀行研究社 1994
 仙崎武・柳井晴夫 高等学校における進学指導 その実践活動の分析(第2次報告) 大学入試センター研究紀要 No 20, 1991
 鈴木規夫・柳井晴夫 因果モデルによる高校生の

- 進路意識の分析 教育心理学研究,
第41巻, 第3号, 82-89, 1993
- 清水和秋・坂柳恒夫 進路不決断と進路成熟 父
親, 母親, 友人, 教師の影響に関する
高校生の横断的研究 進路指導研究, 第9号, 28
-36, 1988
- 下山晴彦 ある高校の進路決定過程の縦断的研究
教育心理学研究, 32, 43-48, 1984.
- 豊田秀樹・前田忠彦・室山晴美・柳井晴夫 高等
学校の進路指導の改善に関する因果モデル構成
の試み 教育心理学研究, 39, 316-323, 1991
- Weiner, B. A theory of motivation for some
classroom experiences. *Journal of Educa-
tional Psychology*, 71, 3-25, 1979
- 藤田英典 進路選択のメカニズム 青年期の進路
選択 山村健夫・天野郁夫編 有斐閣, 1980
- 山本真一 大学進学率規定要因の分析 教育社会
学研究, 第34集, 93-103, 1979.
- 柳井晴夫・清水留三郎・前川眞一・鈴木規夫 進
路指導と大学情報に関する調査結果の分析 大
学入試センター研究紀要 No 18, 1-71, 1989
- 柳井晴夫・前川眞一・豊田秀樹・鈴木規夫・仙崎
武・赤木愛和・中島直忠 高等学校における進
路担当教師を対象とした進学指導の実態に関す
る調査研究 学力偏差値を中心とした進学指導
の改善を中心として 大学入試センター研究紀
要 No 20, 93-166, 1991
- 吉本圭一 高校教育の階層構造と進路分化 教育
社会学研究, 第39集, 172-186, 1984

1997年1月27日 受付

1997年2月28日 最終修正

A Study on Career Choice of High School Students

Norio SUZUKI*

Kumiko SHIINA**

Tomoichi ISHIZUKA*

Haruo YANAI**

In Japan, a career choice of a high-school student after his/her graduation is one of the important decision making processes in his/her life. So far a number of studies have shown various characteristics related to their career choices. The purpose of this study is to investigate the relationship between these characteristics by conducting the nation-wide survey performed to 14,318 high-school students. Main findings are as follows.

- (1) A career choice after high-school graduation whether a student goes on to the next stage of education or gets a job mainly depends on the following two factors. One is the personal factor such as his/her school records and his/her parent(s)' expectations. The other is the school organizational factor such as the rate of students who go on to the next stage of education or the characteristics' of the high school courses. These two factors are consistent with the results of the previous studies.
- (2) The personal factors such as school records and parents' expectations have strong influences on forming the consciousness related to career choice: inclination for educational background, learning efforts and career prospect, while the school organizational factors have little influences.
- (3) Factor analysis revealed following two motives : i.e. study-oriented motive and moratoria-oriented one. Analysing the relationships between these motives and three kinds of consciousness related to career choice, it was found that the correlation between the study-oriented motive and the three kinds of the career consciousness was strongly positive.
- (4) Further the analysis showed that girls had stronger study-oriented motives than boys. The moratoria-oriented motive had a positive relation to the inclination for educational background, while the moratoria-oriented motive had negative relation to the learning efforts and the career prospect. These results suggest that students with a strong moratoria-oriented motive tend to enjoy pleasant lives at universities.
- (5) It was found that career prospect, abilities to solve scientific problems and moratoria-oriented motives strongly affected choices of faculties.

keywords:

career choice, consciousness related to career choice, educational background, learning efforts, career prospect, study-oriented motive, moratoria-oriented motive

* Evaluation and Follow-up Study Section, Research Division, The National Center for University Entrance Examinations.

** Scholastic Aptitude Section, Research Division, The National Center for University Entrance Examinations.